

特集「言語文化教育のポリティクス」

【委員企画フォーラム】

経験から編み直す言語文化教育ポリティクス

M-GTA を例として

シンポジスト

木下 康仁
(立教大学社会学部)

根本 愛子
(国際基督教大学教養学部*)

中井 好男
(同志社大学日本語日本文化
教育センター)

コーディネーター・司会

牛窪 隆太
(関西学院大学日本語教育センター)

概要

本稿は、2017年2月26日に関西学院大学において開催された言語文化教育研究会第3回年次大会委員企画フォーラムの記録である。

Copyright © 2017 by Association for Language and Cultural Education

キーワード 質的データ分析法, M-GTA, 個人の語り, 経験, エンパワメント

1. 企画者より

本稿は、2017年2月26日に開催された言語文化教育研究会第3回年次大会において委員企画フォーラムとして実施された、「経験から編み直す言語文化教育研究ポリティクス——M-GTAを例として」の記録である。本フォーラムは、関西学院大学上ヶ原キャンパスG号館201教室で実施され、学会内外より多くの参加者を得た。本稿がこれから質

的研究を始めようとする実践研究者の一助となれば幸いである。なお、フォーラムの臨場感を伝えることを目的として、本稿ではできる限り文字化記録に忠実な文体を用いている。

2. 各登壇者発表

2. 1. 企画趣旨説明(牛窪隆太)

では、本フォーラムの企画趣旨から説明します。まず、言語文化教育において、なぜM-GTAなのかということですが、M-GTAでは、「研究する人間の

* 当時。現、東京大学グローバルコミュニケーション研究センター。

視点」というのが分析上の重要な概念としてあります。これにちなんで、まず簡単に、「企画する人間の視点」つまり、私の個人的な研究関心の変遷から、なぜM-GTAにたどり着いたのかということ企画趣旨としてお話ししたいと思います。私自身は日本語教育をフィールドに研究活動を行っておりまして、普段は留学生に日本語を教えています。修士課程では「学習者主体」という日本語教育で言われている概念がありますが、その理念をどのように教育実践の中で実現していくのかということの研究していました。教室活動を主に専門として分析を進めていく中で、「活動型日本語教育」や「協働学習」というようなことを考えるようになりました。そしてマスターが終わった後に、実際に教壇に立って教師デビューしました。その時に、簡単に言うと「リアリティーショック」を経験しました。つまり、それまで理念的にこういう教育がしたい、こういう活動のあり方がいいと思っていたものが、実際に教育機関の現場に立つと、いろいろな制約があるということに改めて気がついたということです。例えば、現場には、シラバスや教科書、あるいは試験などがあります。また、日本語教育の現場では、チームティーチングを採用しているという事情もありまして、授業を一学期間、一人で担当するのではなく、他の先生と組んで一つのコースを担当することが多いです。つまり、コースコーディネーターの存在や他の教師の関係性も制約になりうるということもあります。今回の大会テーマは「言語文化教育のポリティクス」ですけども、私自身、当時はいろいろな力学の中に置かれ、そこで学習者の主体性を活かす教室活動とは、どのようなことなのかということを試行錯誤していました。その過程で、そもそも、学習者の主体性を活かすためには、教師として自分が主体性を持たないといけないのではないのかという風に考えるようになりました。つまり、教科書が決まっていますシラバスがあって、「このコマを担

当してください」という風をお願いされるのですが、それをそのままやっているのは、果たして主体的であると言えるのかということを考えるようになったということです。そしてそのように考えるうちに、現場教師の置かれている「教師環境」というものを問題にしなければならないのではないかと考えるようになりました。そこで博士課程では、教師の研究をするようになりました。私が実際にやっていたのは、新人の日本語の先生方にお話を聞いて、新人教師がどのようなことに葛藤を抱いているのか、主体性はどのように発揮されるのかということを考えていました。その時に問題になったのが、教師としての自分自身の教授経験です。教師の研究を始めたときにはもう既に教師として経験がありました。つまり、教師としての自分がありながら、今度は、研究者として教師について研究しなければならない、という構図に置かれました。それなりに教授経験がありましたので、新人の先生方の語りを聞いていても、「いや、そういう風に考えるとよくない」ですとか、「そういうことを言っているとこうなる」というような、いろいろな思いが自分の中にはありました。そういう自分自身の立ち位置や日本語教育観というのが、研究結果に影響を与えるということは、当たり前といえば当たり前です。しかし、それを強みとして考えていいのか、弱みとして考えるべきなのかというのは、当時、博士論文を書きながら、自分の課題として非常に強くあった部分です。

そんな中でM-GTAの著書を読む機会があって、M-GTAでは「研究する人間の視点」というものが概念として立てられているということを知りました。そして他にも、分析ワークシートを使って比較分析を行いながら、概念を立てる、ですとか、分析焦点者を定めることで限定的な理論を生成するということが書かれていました。M-GTAでは、まず、あるプロセスに注目します。その入り口と出口を明確に考えながら全体の理論を考えていく。そして分岐点

を示すような概念に注目するというように、コーディングについても方向性がはっきりと示されていると感じました。

私もそうでしたが、初めて質的研究をはじめた時というのは、どうしたらいいかわからないことが多いと思います。会場のみなさんの中にも、実際に質的研究をされている方が多くいると思います。質的研究は、言葉を言葉で置き換えていく作業なので、この言葉をこの言葉に置き換えて本当にいいのかというのは、分析をしながらも非常に悩まれる部分だと思います。そういう部分についても、M-GTAでは、オープンコーディングと選択的コーディングで収束化していく、というように、道順が非常に明確に示されていて、自分自身の経験を参照しながら、つまり、自分の教師としてのあり方を強みとして持ちながら、それでも他の人たちの経験を記述するための方法論が揃っているのではないかと考えました。教師が教師の研究をしていると、自分の教師としての思いが、非常に暴走することがあります。それで、こうしなければならない、こういうのはけしからん、というような論文になってしまいそうになります。でもそんな中で、その思いを制御する強みが、M-GTAには揃っているという風に私は考えています。その後、M-GTAを使って、データを分析して論文を書きました。今日お招きしている根本さんと中井さんは、M-GTAを使って論文を書かれた先輩です。自分が研究する時にも、このお二人の論文をよく読んでいました。そのお二人をお招きして、言語文化教育研究の中でM-GTAを使うことにどういう意味があるのかというお話を聞いてみたいと思ったのが、企画意図の一つ目です。

しかし、これだけだと自分の欲望につられてフォーラムの企画をしたように聞こえてしまうかもしれないので、もう少し、日本語教育という領域に開いて、説明したいと思います。日本語教育学においては、最近、質的研究が非常に注目されるようになってい

ます。おそらくマスターで入って、日本語教育を専門として論文を書こうとすると、半分以上の人が、何らかの質的研究の方法論でインタビューをまとめるということをするのではないかと思います。

この背景には、近年、日本語教育が学問としてどのように確立できるのかというような議論が、再び活発になされるようになってきたということがあると思います。こちらに三冊あげましたけれども、『日本語教育 学のデザイン』（神吉，2015）、『日本語教育学の歩き方』（本田，岩田，義永，渡部，2016）あるいは『実践研究は何をめざすか』（細川，三代，2014）という形で、日本語教育学の根本を議論するような本が出版されるようになってきました。これらは、この学会の関係者も多く執筆に関わっている本です。日本語教育とは、そもそも、他分野、例えば言語学や国語学に軸足を持つ先生方が1960年代に「留学生が今後増える」ということで集まってできた分野です。それが今では、日本語教育を軸足として研究活動を行う研究者が増えてきました。これらの研究者は、自分の教育実践を行うフィールドを持っている研究者で、日本語を教える仕事をしています。そうすると必然的に言語から言語を使う人間自体へと関心が移るわけです。その中で、質的研究が注目されるようになってきているということがあると思います。

そして、若手研究者は、日本語教育を軸足として研究活動を行って学位をとる、ということになりますので、そうすると、学位論文に耐えうるデータ分析法が必要になります。ここにざっとあげましたけれども、会話分析ですとか、ライフストーリー、ライフヒストリー、エスノグラフィーですとか、M-GTA、SCATですとか、最近では、TEMというものもよく論文で見られるようになりました。

その一方で、日本語教育の実践に目を転じてみますと、その方法論をめぐって、「なんとなく新しい方法論問題」があるような気がしています。これは

簡単に言いますと、オーディオ・リンガルメソッドからコミュニケーション・アプローチという転換が日本語教育には、大きな転換としてあったんですけれども、まあ教え方の転換ですね。その中で、昔は本質的な議論が、結構活発に起きていたんですが、それ以降、いろいろな教育実践の方法論が入ってきてはいるけれども、その方法論をめぐって議論がなかなか起きていないのではないかと、ということです。西口 (2012) では、日本語教育の学会誌に載っている教育に関する論文を概観したうえで、日本語教育の方法の原理に関する議論・論争というのは、1990年代前半で途絶えているということが指摘されています。しかしながら、それ以降もちろん、いろいろな方法論というのは、教育実践に取り入れられて、実施されているというのが現状です。つまり、本質的な原理に関する議論というのはなかなか起きていないけれども、新しい方法というのは常に入ってきて、実施されている。それで、実施しているうちに段々それが古いものようになって、また新しい方法が外から来る。このように、日本語教育は、外からの「なんとなく新しい方法論」をなんとなく教育実践の方法に取り入れ、消費してきたのではないかと、そして実際には、何も消化できていないのではないかと、という問題意識を私は持っています。

同様に、質的研究についてもいろいろな方法論があるけれども、それが加算的に個別的に、外からの、例えば社会学の人が日本語教育をフィールドに社会学のための知見を作るというような形で実施されるのであれば、なかなか言語文化教育の発展には繋がらないのではないかと、ということです。これに関連して、広瀬 (2015) では、質的研究で、何のために何を明らかにしたいかは言語観・教育観の問題と繋がっているということが指摘されています。

では、私たちがいる、言語文化教育という分野において、自身のフィールドの改善を目的に質的研究を行うときに、どのような形、どのような意義が考

えられるのか、ということを考えてみたい、というのが、本フォーラムの企画の二点目の動機です。

では、早速ではありますけれども、次に発題1としまして、「海外日本語学習者の学習動機の研究から」について、根本さんから、お話ししたいと思っています。

2. 2. 発題 1：海外日本語学習者の学習動機の研究から (根本愛子)

根本です。よろしくお願いいたします。今回は牛窪さんのほうからお話をいただきまして、発題1としまして、「海外日本語学習者の学習動機の研究から」ということで、私が何故 M-GTA を選択して、その研究を試みた上で、どのようなことを考えたのかということをお話して欲しいということをおっしゃったので、そのように準備をしておりました。

私はカタールの日本語学習者の学習動機を研究テーマとしてやっておりましたので、サブタイトルとしては「カタールの日本語学習者を一例として」と入れさせていただきました。今回の研究なんですが、宣伝みたいな話になってしまって申し訳ありませんが、『日本語学習動機とポップカルチャー——カタールの日本語学習者を一例として』(根元, 2016) というところで、本にまとめさせていただきました。博士論文として提出したものを、修正・加筆をし、2015年度 M-GTA 研究会出版助成を受けて出版しました。

私自身はこの M-GTA にたどり着く前に量的な方法で学習動機研究というものを一度やっております。そこから何故、質的研究、インタビューになり、どうしてその中で M-GTA を使うことにしたのか。それをやってみて、どのような結果が出たか。ただ今回は研究結果を中心にお話する場ではありませんので、こちらはかなり省いております。またそれをやってみて、どのようなことを感じたか。そして、現場の教師が研究するということはどういうことだ

と思っているか、というものまでお話できればと思います。

まず、はじめに研究のきっかけです。私はカタール教育省語学教育センターで設立されました日本語講座に日本語教師として、カタールに行きました。それが2006年の秋のことです。出発の前に国際交流基金や日本の外務省などから説明を受けた時に言われたことなのですが、何故カタールで日本語講座をやるのかというと、それは日本のポップカルチャーに興味を持ったことで、日本語学習を希望する人が増えたから。つまり、日本のポップカルチャーが学習動機となっていた、ということです。おそらくこれはみなさん聞かれたことがあると思います。このように言われていましたし、私も他から聞いたり一般的に言われていることでしたので、なるほどそういうことかと思って、カタールに行った次第です。

ここで実際に、言語センター、LTIと言わせていただきますが、Language Teaching Instituteの略です。こちらに赴任した後、まず自分が教えていたんですが、「学生は来るものの続かない」ということがありました。2年間で初級が修了する講座だったんですけども、実際始めた学生の2割以下ですね、正確な数字としては17%程度しか修了までいきませんでした。しかも、半年過ぎた時点で、7割ぐらいの学生がもうやめていきます。どういう人がやめるかということ、これは私の印象なんですけれども、「日本が大好きなんです」とアピールしてくる学生とか、「このドラマが大好きで」っていうドラマのストーリーを熱く語る学生、そうしたことが熱ければ熱いほど、早くいなくなるなっていうのが私の印象でした。実際はどうだったかっていうと正確にはわからないんですが、そういう印象がありました。

もう一つ、学習動機はポップカルチャーだと言われていましたので、市内にあるカタール大学の日本クラブ、そちらはポップカルチャーが好きだという

人たちが集まっているというので、そこにリクルートというか学生の勧誘・宣伝に行くわけです。しかし、まあまず大学からは人が来ません。100人、200人とメンバーがいるんですけども、全く人が来ません。チラシを持っていくんですね、日本大使館から「このチラシを持ってってください」と100枚渡されますが、10枚もチラシはさばけません。大量のチラシが余って戻ってくる。そういう状況になりますと、最初に言われた、ここの部分(ポップカルチャーが学習動機になっているという部分)、これは本当なのか、と疑うようになりました。これが本当だったら、もっと人が来るし、ちゃんとみんな続けるはずだ。でもやめてしまう、来ない、ということは、違うのではないかと考えました。

ということで、まずアンケート調査を行ってみることにしました。LTIの受講生、QUJC(Qatar University Japan Club)の所属学生の比較です。で、受講生はポップカルチャーを学習動機として日本語をはじめたとされている。そしてまた、カタール大学の学生たちというのは、ポップカルチャーに興味があって、日本語学習者予備群と考えられている人たちです。この人たちの日本語学習動機をまず知る。そして日本語学習者予備群とされている人たちは、どういうことに興味・関心があるのかを知る。そうすることで、日本語学習を開始するかどうかの違いがわかるのではないかと考えました。特に学習動機と言いますと、アンケート調査を行い、それを因子分析する、というのが一般的と言いますか、先行研究を見ますとそういう研究が多かったので、同じようにやってみようというのが最初です。ただ、学習動機そのものもそうなんですけれども、この二つのグループがどう違うかというのを知りたかったので、その結果をt検定を用いて比較するというを行いました。

その結果わかったことが、カタール大学の学生たちのほうが、日本や日本語に関して、何にでも高い

興味を示す傾向があるということでした。反対にいうと日本語学習者の方が、興味の範囲が狭いということがわかりました。また、日本語講座の受講生というのは、言語学習への興味・関心がカタール大学の学生たちよりも高く、そもそも言語学習が好きなんだ、ということです。ただ、やはり疑問として残ったのが、じゃあ学習動機は本当にポップカルチャーなのか、そして、カタール大学の学生たちはどうして日本語学習を始めないのかということです。いや、もしかするとこれは、カタールの大学生全体がこういう傾向があるのではないか、というような疑問です。ですが、このアンケート調査ではポップカルチャーに興味がある人がなぜ日本語学習を始めるのか、始めない人との違いは何かというのは、わかりませんでした。

そこで、さらに、今の二つのグループプラス、カタール大学の一般の学生にもアンケート調査を行い、分析をしました。まあ、一般の学生というのは、あまりクラブには入っていないので、ポップカルチャーに対してそこまでの興味は持っていないという人たちです。その結果わかったのは、基本的に、日本語講座の受講生とカタール大学の日本クラブの学生というのは統計的な有意差はありませんでした。また、この両者の興味・関心や学習動機としての日本に対する気持ちというのは一般の学生よりも強いこともわかりました。ただ、この基本が崩れる場合があります。どういうところで基本が崩れるかというところ、ポップカルチャーに関する要因と、あと日本に関する全体的な興味・関心についてで、カタール大学の日本クラブの学生たちが日本語講座受講生よりも高い関心を示すことがわかりました。つまり、カタール大学の日本クラブの学生、日本語学習者予備群とされている人は、実際の日本語学習者やあまり日本に興味を持たないと考えられる人たちよりも、日本に関する興味・関心が何にでも高く、また、特にポップカルチャーの興味関心が高いという結果に

なりました。

そうするとやはり、じゃあ、どうして日本語を始めしてくれないのか、という疑問は強くなるばかりでした。そこで、もうこのアンケート調査では限界があるだろうということで、インタビュー調査にしよう、質的研究をしよう、と思うようになりました。結局、講座の受講生とクラブの学生たちが違うことはわかったんですけども、なぜ違いが生じたのかはわからなかった。そのことを考えたところ、これまでの来し方、いわゆる彼らの歴史の経験や、その経験から感じたことがきっと違うのだろう。アンケート調査というのはある一時点に関することしか明らかにできないので、それであれば当然、来し方がわからないわけです。そしてまた、過去のことを知りたいのに、今どう思いますかということ聞いても、あまり意味がないわけです。つまり、学習動機に関する先行研究というのは、現在どうして日本語を続けているか、その動機がどのように日本語力、成績に影響するかという、そういうことが非常に多かった。「ああ、やるべきことがちょっと違うんだな」と考えました。継続じゃなくて、なぜ始めたかっていうのを知るには、アンケート調査ではおそらくダメなんだなっていうことを思いました。また、アンケート調査ですので、こちらが入っていない調査項目に関してはわからないんです。だから一見、学習動機として出てきていないと思われるものも、なぜ上がってこないかを考えると、それは調査項目に入っていないから、ということが多々あることだということを考えました。じゃあどうすればいいかを考えた結果、こちら、調査者が想定していないことは本人に確認してもらわなければならないようになりました。そこで、インタビュー調査をしようというところに至ったわけです。

インタビュー調査をするといいますが、ただ聞いて、「はいはい」とまとめるわけにもいかず、特にアカデミックな分野で何かしようと思えば当然、

どのような方法でインタビューし、分析するかというものまで考えなければいけません。

なぜ私が多々ある中で M-GTA を選んだか、どうやって M-GTA に行き着いたかという単純です。質的研究といわれるものに、片っ端からあたりました。自分がやりたいことはわかっている。これが、この方法を使ってできるのかどうかという、エア分析といえますか、脳内で妄想をする。自分が、この方法でやったら、どういう手順を踏んで、どういうことがわかって…というのを考えながら、片っ端から当たったわけです。先ほど牛窪さんがあげたような、ライフヒストリー、エスノグラフィーとか、参与観察、とにかくいろいろです。

ただその時に考えるべき条件がありました。まず私がやりたかったことは、研究対象が個人じゃなくて「彼ら」である。日本語を始めた人たち、続けた人たち、日本語予備群とされる人たち、それぞれのグループがどのような傾向を持っているのか、彼らの来し方を考えた時、どのようなモデルがあるのか、というのを明らかにしたいのです。したがって、ケーススタディといっても、A さんの場合、B さんの場合、というように個人に焦点を当ててのではない、というのがありました。次に、彼らの来し方を明らかにできる方法、ある一点ではダメなんです。たくさん人の証言があっても、振り返って一連の流れというものが提示できる方法でなければ、自分の研究では意味がないとは思っていました。また、最初の二つは、絶対条件なんですけど、次の3つ目と4つ目は割と後から考えるとそうだなあと感じていたことです。3つ目は、周りでそうした質的研究をやっている人がいなかったり、相談する人がいなかったの、とりあえず、一人でなんとかできそうな方法であることというのがありました。単純に言えば、何か情報を得て、なんとなく「できそうだな」って思えるかどうかです。最後の4つ目は、ただ、やはり最後の段階でいざとなったら助けが求め

られる場があるということです。こうした条件を備えた方法論はないかといろいろな質的研究の方法をあたり、最終的に M-GTA に至りました。

まず条件1に関しては、対象が彼らである、ということは、M-GTA の分析方法では分析焦点者というのを設定してる、というのがあります。個人ではなくて、ある特定の、限定された範囲における研究対象です。その人たちを分析焦点者として、その人たちの視点で考えるというのがありました。また、M-GTA のキーワードとして「プロセスを明らかにする」「理論的モデルを提示する」「分析テーマを設定する」、そして「ストーリーラインと結果図でそのモデルを表す」ということがあります。これは私がやりたいと思っていることだというのを感じることができました。そしてまた、一人でなんとかできる、できそうなことでは、木下先生のご著書で2003年、2007年のM-GTAに関するものがあります。そこに非常に丁寧に、分析の手順が記されておりました。他の質的研究の方法論を読んだ時に、あまりこう、私自身、うまく自分がやろうとすることのイメージができなかったり、イメージをしようとしても具体的ところで非常に詰まってしまう、ということがありましたので、M-GTA についてきちんと手順が書かれているこの二冊の本というのは、やってみようという気になれるものでした。そして最後が、M-GTA 研究会の存在です。M-GTA 研究会は地方でもあるんですけども、私がお世話になったのは東京に拠点を置いている M-GTA 研究会なんです。そちらで研究発表などをしていて、人が集まっているということがわかりました。つまり、最後の最後といいますが、ある程度まとまったらそちらに行って、何か見てもらえないかなという期待が持ってたということです。以上の条件で、やはりちょっとびったりということで M-GTA を選択することにいたしました。こうした経緯で、先ほどのアンケート調査でもやもやとしたものを抱えたまま M-

GTA でインタビュー調査を行い、M-GTA で分析する、ということになりました。

インタビュー調査の対象は二つありました。まず一つ目のグループがLTI 修了生です。分析焦点者は、「日本語講座を修了した人たち」で、分析テーマが「日本語学習動機のプロセス」です。そして、スタートからゴールまでのプロセスということで、日本に興味を持ってから日本語講座を修了するまで、その間にどのようなことを彼らが経験し、それをどのように彼らが消化したり理解したりしたか、どのような影響を受けたか、どのようにそれが行動に移ったか、などを考えていきました。もう一つのグループがカタール大学の日本クラブに所属している学生達です。こちらは、分析焦点者としては「日本のポップカルチャーに興味があるクラブの学生」で、分析テーマは「日本語学習の(不)必要性を認識するプロセス」です。この分析テーマですが、私の方からすると、彼らは日本語学習を始めていないので、「日本語を学習しなくていいや」という結論に達するだろうと、いうところで始めたわけですが、インタビューしているうちにわかったのは、実は彼らは、自分たちを日本語学習者だと思っていたんです。それはなぜかという、カタール大学のこのクラブの活動の中に、日本語の勉強をやるっていうのがあったためです。自分はそういうクラブにいるんだし、日本語を勉強したいとも思っているから、自分たちは日本語学習者なんです、というところがあったので、ちょっと、不必要の「不」を括弧をつけて分析をしました。スタートからゴールということだと、「日本に興味を持ってから、日本語学習を開始するか否かの決断を出すまで」ということで、このプロセスを見ていくということにしました。

インタビューをそれぞれの分析テーマで分析を行いまして、そのプロセスを結果図とストーリーラインにまとめました。それが先ほど提示させていただいた本の方にまとめてあります。今回はそちらの詳細

しい内容は割愛いたします。それぞれの結果を比較すると、両者の違いがわかるのではないかと、ポップカルチャーが本当に日本語学習動機になっているのか、そして、そのポップカルチャーが好きだという人が日本語学習者になるかどうかの違いはどこにあるのか、というのがわかるのではないかと考えたわけです。

それで、比較した結果、学習開始前と社会的相互作用の分野、あと興味の対象というものがこのクラブの所属学生と日本語講座の修了生では全然異なっていることがわかりました。これも本にまとめてはあるんですけども、ざっと見ていただくと、なんとなく違うというのがお分かりになるでしょうか。例えば、どちらのグループも、「子供の頃にアニメを見ていた、日本の漫画・テレビを見ていました」とはいうんですけども、実はカタール大学のクラブの学生達はその記憶が非常にあいまいなんです。その一方で、その修了生達というのは、はっきりとどのアニメをどう見たかっていうのも覚えていて、それが日本のだっていう風に気づいたことで、非常に驚きを感じたということを経験していました。

また、日本語学習を始める前に自分が日本語をどのくらい理解していたかについては、クラブの学生は、まあまあ日本語はだいたいわかりますというんですが、反対に、講座修了生は、日本語がわからなかったというんですね。それがストレスになって、日本語をやろうと思った、というような違いがありました。

また、友人との関わりですね。カタール大学の日本クラブの学生達は、そのポップカルチャーの情報交換をしたり、あと一緒に何かをしたりすることで、友人との関係を非常に強いものにしていました。一方、講座修了生は、友人とそういう情報を共有することがほとんどありませんでした。

さらに、キャリアにおける日本語の位置付けですね。クラブの学生たちは、日本語ができれば就職に

有利になると信じて疑っていません。ですが講座修了生たちは、日本語なんかできたところで就職には全く役に立たないと考えていて、日本語に何も期待はしていませんでした。

また、ポップカルチャーへの興味についても、興味の広がり方でクラブの学生が、「立体的に拡大」という概念にまとめました。例えば、何かのアニメをテレビで見たら、そこから原作の漫画を読んでみる、そこから主題歌も聞いてみる、それをどんどん広げていきます。さらにそのアニメから他のアニメ、他のアニメ、他のアニメというようにつながっていった、さらに同じように原作の漫画・主題歌とか関連本、下手すると、韓国でリメイクされたものまで、もうほとんど手を出している、というのがカタール大学の日本クラブの学生でした。一方、講座修了生というのは、ある一つのことを好きだと思ったら、そこをものすごく掘り下げていきます。やっぱりアニメが好きだから他のものも見るけれども、そこまでじゃないと。自分は好きなのはこれだ、とはっきりと断言できる人たちでした。ですから、同じようにポップカルチャーが好きといっても、何でもとにかく好きっていう人たちと、自分が好きなのはこれだと断言できる人たち、というような違いがあるということがわかりました。

また、興味の対象にもなりますが、言語学習ですね、それそのものがどうなのかというのも違いがありました。カタール大学の日本クラブの学生たちは、学校で勉強しろと言われた英語しか学習経験がありませんでした。その一方で、修了生は、学校でやる前から自主的に、まあ自主的と言いましても家族の意向もかなり強くあるんですけれども、外に英語を習いに行ったり、あとはフランス語をやったり、あとは結構多言語の環境にいたので、バイリンガルでアラビア語、フランス語、英語、ペルシャ語や、インド系の言葉ができる学生が非常に多くて、そもそもそういう新しい言語に対する興味だけではなくて、

需要の度合いというのが非常に高いということもわかりました。

そこでまとめたのが、ポップカルチャーが日本語の学習動機となるにはどうすればいいのかということで、こちら11点を提示させていただきました。これもすいませんが、一つひとつ説明する時間がありませんので、ここではこうしたということをお知らせするに留めたく思います。

まとめとしまして、最初に言っていた、この出発前に言われていた「日本のポップカルチャーに興味を持って日本語を学習する人が増えている、ポップカルチャーが日本語学習動機となっている」ということはどうなのかと考えてみます。実はこれは、各政策、それは日本語教育に限らずクールジャパン政策などでも言われているんことなんですね。この政策の中で想定されている日本語学習者の変化のプロセスとして図としてまとめますと、このようになっていました。まず、非日本語学習者である一般市民、特に若年層が日本のポップカルチャーに興味を持つことで、日本語学習者となる。そして日本語学習者が日本に興味を持って日本の理解者になる、こうしたものを目指しているんだ、というように政策の中では言われています。しかし、このカタールの事例から見ますと、実はこの想定されているプロセスというのはおそらく違うんです。それで実際の日本語学習者の変化のプロセスを私はこのように提示しました。まず、一般市民が日本のアニメやゲームを通して、日本語がなんとなくわかってきた、そしていろいろなものに興味を持ち始めた、というような人たちが、漠然とした日本語学習者となり、それと同時に何にでも好き、ということで盲目的で全般的な日本ファンになっていくだろうということです。一方、日本のアニメやゲームを通して、日本語がわからないというストレスを持ったり、あとは自分の興味が特定のものに収斂していった、自分はこれが好きなんだ、というようになった人たちというのは、

機関所属型日本語学習者になり、それと同時に、非常に冷静で部分的な、日本ファンになっていました。この「日本ファン」というのは、ここでは括弧がつくことになると思うんですね。それは、皆さん「別に日本だから好きってわけじゃないんだ」ということを言っていましたので、日本ファンといえるのかどうか、というところがあるわけです。ですが、このようになっていくということが事例から導き出せました。

そこで、この一連の結果から言えることというのが、日本語学習者というのは誰なのかということです。国際交流基金の「海外日本語教育機関調査」を皆さん見たことがあると思うので、お分かりかと思いますが、あれは機関を対象にしているわけで、機関に所属していない人たちというのは数に入っていないと言っています。やはりどうしても相手にする人たち、政策で数字として出てくるのは、機関に所属している人たちだけです。なので、どうしてもそちらを増やすことばかりが言われますけれども、分析の結果を踏まえれば、日本ファン、日本理解者を増やしたいなら、特に機関に所属しない、漠然とした日本語学習者が増えるのもいいのではないかと、いう風にも言えます。また、日本理解者も、どのような日本理解者が欲しいのか、これは日本なら何でもいい、なんでも好き、と言ってくれる人たちが欲しいのか、それとも特定の分野で冷静な目をもって、日本のことを考えられる、そういう人たちが欲しいのかがはっきりしていないんですね。海外日本語教育を展開させていくにあたって、どういう人たちを求めているのかをということを明確化・具体化する必要があるのではないかと、ということがいえると思います。

こうした中で日本語教師ができることについてです。私が何かおかしいんじゃないかということでこの研究テーマを思いついたのは、現場で実際の学習者と接することがあったからです。それをきっかけ

に研究を始めた、ということで、現場だからわかることがあった。じゃあ想定と、実際の姿が異なる場合、今回ですと、政策上言われている日本語学習者・日本理解者と実際が違う場合どうするのか、といった場合は、やはり本来であれば、想定を実際に近づけるわけです。実際の姿というものを優先させるべきだと思っています。これまで日本語教師というのは日本を発信することが重視されていたと思います。日本語教師養成に関することなどを見ましても、日本をどう伝えるかということが重視されています。ですが、私自身、この研究を通して思ったことは、学習者の実際の声を受信して、学習者の声を発信するということが必要ではないかということです。これができるのが現場の日本語教師です。学習者の声を受信して発信する、そうしたスキルというものも、必要ではないかというように今は思っています。

最後になりますが、現場の教師が研究するということについてです。まず現場の教師なので限界があります。私が実はやりたかったのにできなかったインタビューが一つあります。それは講座中断生へのインタビューです。どうして一度日本語を始めたのにやめてしまったんですか、というのはとても聞きたかったんです。でも、できませんでした。なぜできなかったのかというと、まあ、現場の先生たちですとお分かりかと思いますが、私が彼らの日本語教師だからです。学生に、日本語やめたら先生が追っかけてきて、なんでやめたの？と迫ってくる…と思われるかもしれない。それはよくないなと思いました。もう一つの理由は、仮に私のことが嫌いだったり、私の教え方が合わなかったりしたとしても、それをおそらくいう人はいないだろうということです。「先生の教え方が嫌だからやめました」「あなたの顔を見たくないからです」。そんなことは、絶対言わないだろうなと思うと、本心が聞けないようなインタビューが必要かということがありました。

現場にいたからこそできたことというのは、やはり、気づいたっていうのもあるんですけども、普段の話とか様子を参考にすることができたことです。インタビューでも「あーそうだね、お父さんもこういう風に言ってたよね」ってというような話がありました。それから、学生との信頼関係があったことです。インタビュー協力者は2年間の講座を終えています。2年間、毎週毎週、顔を合わせていますので、非常に信頼してくれて話を聞くことができました。

ですので、現場の教師が研究するといった場合に、こうした学習動機研究ですと、信頼性に欠けるデータを、相手に負の感情を抱かせてまで取る必要があるのかということがあります。一方で、より深い厚みのあるデータが取れる可能性があるというのが、良い点でしょう。この葛藤というのがやはり常にあるのではないかと思います。以上です。どうもありがとうございました。

■牛窪：根本さん、ありがとうございました。ではあの、質疑応答の時間をですね、あとでまとめて取れるようにしたいと思いますので、このまま続けて次の中井さんの発題に移りたいと思います。

2. 3. 発題 2：日本語学校における再履修者の研究から（中井好男）

はい、それでは始めさせていただきたいと思います。中井と申します。よろしくお願ひします。先ほど根本さんのほうからアニメとかポップカルチャーが学習の開始にどういう風に至っていくのっていうプロセスをお話でしたが、私は、実際もう学校を出て、日本語学校なんですけど、そこで勉強している人たちに何が起きているのっていうことに着目して学習動機という概念から M-GTA を用いて分析した研究について、今日お話をさせていただきたいと思います。今日お話をさせていただく研究の本なんですけど、まだちょっと今印刷中で、それぞれ再履修

者へのインタビューを分析した部分と教室を観察して分析した部分と教師へインタビューして分析した部分と、それぞれ別のところに載せておりますので、そちらのほうでももしご興味があれば、後ほどまた参考文献として紹介します。

根本さんと同じように私も今日はこれについて詳しくお話するというより M-GTA を使うことで何が起きているのかっていうか、実践者がこの研究をすることでどういうことが起こるのかっていうことについて、お話をさせていただきます。「違う」とか何かあれば、次の質問でいろいろご意見いただければ幸いです。

私がこの業界に携わるようになったのは 2001 年です。日本語学校にいたのは、2001 年から 2006、7 年ぐらいまでなので、もう 10 年前ですので、現在、日本語学校で働いている方々が認識されているものとちょっと違うかと思います。ですから、最初に少し当時の状況をご説明しておきたいと思います。当時は、これ 2000 年の頭ぐらいですが、中国の方が対象でした。経済発展に伴って留学ブームというのが中国で起こっておりまして、学習者がどんどん増加している時代でした。私がいた時も、学期ごとにクラス数が増えていって最終的には建物に収まらなくなって引っ越しするということを経験しています。それとともに、やはりその昔は、すごく目的意識が高い方が多くいらっしゃって、一生懸命勉強、勉強命という方が多かったですけど、段々留学が一般化すると、さまざまな方が来られるようになって、「とにかくやることないんで来ました」とか「大学落ちたんで来ました」みたいな人とか「親に言われたから嫌なんだけど来たんです」っていうような方も増えてきて、教室で起こる現象っていうのがすごいいろいろ多様化していく、っていう私にとっては激動の時代でした。そういうことがあるので学校が設けていたカリキュラムやクラスのレベル設定に合わない学習者の方がどんどん増加していきました。

学校はどうしていったかという、そのレベル設定を変えるのではなく、テストなどで測って、「あなたこの点数に達してないんで、もう一度このレベル、履修してください」というように、再履修という対応を取っていました。

実際に私が再履修者の方と会うというか、再履修者の方がたくさんいるクラスを持たされるのが非常に多かったものですから、よく知っているつもりだったんですけど、その時の共通の教師の間での認識としては、とにかくやる気がないと。来るか来ないかも分からないし、来たところで寝てるし、とか。話は聞かないし、とか。あと「これをしてください」とか「宿題は」と言っても出さないし、「やりたくないし」みたいな感じで返事されたりとか。結構対応に困るっていうことがありました。あと、すごく静かです。多分これは私の学習者観の影響かもしれない。この人たちは何でこんなにつまらなさそうに座っていて、何も話さないんだろうっていう。まあ今ではそれが悪いとは言えないこともわかってるんですけど、当時、私はまだ駆け出しだったので、楽しくわいわいやるっていう学習観・教室観みたいなものも持っていたので、私も当時これが問題だなあっていう風に思っていましたし、同僚の先生方もこんな感じで認識されていました。問題意識として、なぜ再履修者はそんなに手を妬く存在なのか、っていうのと、どうしてやる気を失っているのかのように見えるのか。実際にやる気がなさそうで態度も悪いですけど、一人で一生懸命勉強してる人、先生の話聞かなくても教室活動に参加しなくても、なんか一生懸命、問題集を解いたりとか、やってる方がいらっちゃったんですね。だから何でそういう風に見えるのかってこと。あと、それに関連してですね、再履修者は本当に勉強していないのかということがありました。それから、これは大前提ですが、何で再履修を強いるような事態になるのか。まあそもそもシステムがおかしいんじゃないかって

いうことが当時の問題意識としてありまして、学習動機っていう観点から再履修っていう経験を理解することと、教師が今後どうしていけばいいのかっていうのを明らかにするのを目的として、この研究を行いました。

当時、研究に期待していたことというのは、再履修者がどういう経験をしているのかっていうのと、学習動機の変化の過程ですね。それが分かればいいな、っていうことです。それから、教師とか学校が対応を考える際の何かの指標になればいいかなと。そういうのを明らかにできたらいいかなあとってこの研究を始めました。で、プロセスが分かるっていうことと、あとでお見せしますが、概念図っていうか結果図が出てくるので、M-GTAが一番妥当であろうということで、これを採用してやりました。先ほど申しましたけれども、学習者が再履修者になり、その後どうなっていくのかという過程について勝手に名前をつけました。14名の学習者の方にインタビューをして、再履修者の方が捉えている日本語学習を書きました。

教室編は私が参与観察に入りまして、3名の学習者に着目して参与観察をしました。彼らと彼らに関わっていた教師5名にインタビューをお願いして、そこから得られたデータでまとめました。あとは教師編で教師たちがどう対応しているとか、彼らをどう捉えているのかっていうのをインタビューして分析した、っていうこの3つの大きな三本柱があって、最後にもう一度見直して、がっちゃんこして、大きい理論図っていうのを作りました。

やっぱり研究をする時に、いま私がここで偉そうにいうことではないと思うんですけど、何を明らかにしたいのかっていうことと、それはどういう質のものなのかっていうのを必ず押さえてから方法論を決定するっていうこと。これは本当に大事なんだなっていうのを最近つくづく感じております。それとあと何のためにやるのかっていうこと。そして、

それをすることにどういう意味があるかっていうのを研究の意義として考えていく必要があるだろうと思っています。先ほど根本さんのお話にもありましたが、一人の経験を知るのではなく、「彼ら」っていうのを対象にしているということ。それから助けが得られるとか、一人でなんとかできそうだっていうものですね。そういういろんな理由から M-GTA を採用しました。私が明らかにしたかったのは学習動機なんですけど、学習動機といっても要因を分析するとか、あと自分で自分をどう動機付けしていくとか、その自分と現在の自分の差を埋めていくことが学習動機である、とかいろいろ言われていますが、やっぱり教室の中だけではなくその人が生きてきた経験っていうのを知らないと学習動機を知ることができないと言われていて、まさにそうだなと思いました。ですから、そういう文脈、経験ですね、そういうのを切り捨てずに分析ができる。しかもプロセスが見えるっていうことで M-GTA を選びました。実はですね、修士論文の時に GTA を使った同じような分析をしていたんですけど、私のやり方がまずかったんだとも思うんですけど、データをやっぱり細切れ・ブツ切りに分析していくことで「あれ、これ一体なんやったんやろう」っていうことがありました。データのこの細切れになったものが部屋じゅうに散らばってどうしようもないなっていう感じになったり、「これは誰が言ったことなんだ」「どっから出てきた言葉なんだ」っていうのをまたデータに戻ったりとか聞き直したりとか、することがあったんです。すごくなにか、空虚なというか「これ、なに？」っていう感覚しかなくて、現場に根付いてないというか、なんか数字だけを扱っているような感覚になったんですね。でも M-GTA っていうのは、その文脈を残すことができるっていうことが木下先生の本に書かれていたと思うんですけど、私はそう理解しました。そこが当時の私にとっては響いたところですね。ただ現場にいる感覚、学

習者の話とか昨日インタビューした感覚、彼らの経験を残しながら分析できるということで、M-GTA を採用しています。イメージとしてはデータからどんどん抽象化して行って、特徴を吸い上げていく。で、最後にそれを理論化するっていうものですが、やっぱりその文脈を残せるというところで M-GTA が私にとっては非常にいい方法論でした。

一方で、GTA というのはすごく客観的で実証的なものです。データから発見される事実を、先入観を持たない研究者が発見・事実を吸い上げていく、それを理論化する、っていうものなんですけど、実際そうなのかっていうところですね。インタビューをするのも研究者です。で、分析するのも研究者です。何が大事かとか、何が問題かって結局吸い上げていくのも全部、研究者がやることなので、やっぱりどうしても主観が残っていると云わざるを得ない。まあ GTA にも構成主義的な側面があるだろうという風に言われています。それで、それから木下先生が御発案された M-GTA は、現実を理解するためにデータ化を行うこととその人間の感覚的な理解の重要性。感覚的な理解の重要性っていうのを積極的に取り入れられているところがやっぱりいいなと思いました。理論的感受性という形で言われることがありますけど、なんて言ったらいいんですかね、勘ですかね。ここが問題だ、って気づく勘みたいなのが重要で、そういうのを磨いていかないといけないって言われているんですけど、まあこれは感覚的な理解と関連しているんじゃないかっていう風に私は考えています。で、もともとあった GTA の特性に、木下先生がそこに3つの修正を加えられて「コーディング方法を明確化する」、あとは「意味の深い解釈をする」っていうのと、あと「独自の認識論」っていうのを加えられています。

ここで、この感覚的な理解とか、理論的感受性とか、勘が必要やっていうけどじゃあその勘って一体何なのか。で、データを理解するっていうのはどう

ということなのか、っていうこと。これはここで一つの私の問題として取り上げたいと思います。それから、M-GTA では「独自の認識論」というのがあって、研究者が机の上で他の人たちから持ってきたデータを分析する。なんかまるで、神の視点でなんでも操作できる、というようなものではなくて、やっぱり研究する人はその現場での問題意識を持っていて、自分のこういう感覚があって、分析するんだっていう、この分析テーマと分析焦点者と研究する人間っていうモットーっていったらいいですかね。こういう研究者は素晴らしい、神のような存在だ、ではなくって、この現実問題として研究する中での一つの主観を持った存在であるっていう風に捉えるっていうことですね。そういう独自の認識論が M-GTA にはあるという風に理解しております。ここで問題になるのが研究者とは何か、っていうことですね。どういう存在なのかっていうことです。まあ言ったら「その人の主観から出てきた理論じゃないのか」って言われることがあります。私もいろんなところで発表すると必ず「これ、あなたの主観ですよ」って一蹴されることがありました。じゃあそこで出てくる理論って一体何なのかっていうこと。これが問題になると思います。なので今日は、「理解とは」「研究者とは」「理論とは」っていうこの3つをあとで検討していきたいと思います。

再履修者の方からのデータで理論を作った結果がこれですけど、17歳18歳、高校を卒業してすぐ日本に来られる方ばかりだったんですけど、その両親からの自立心っていうか「自分でやっていくんだ」みたいな気持ちですね。そういうのを持って、そういう自立心があるからこそ、アルバイトをして「もう自分で学費払っていきたく、親に頼りたくないんだ」っていう気持ちがどんどんこう、芽生えていくことがわかりました。そこから、だけどやっぱり寂しい、孤独なんですね。一人っ子の人たちで両親との繋がりが非常に強い。なんでも親にやって

もらってきた、っていう人たちなんで、やっぱり突然ポンと、しかも外国に離れたところに置かれることで、すごく孤独だと。で、孤独だけど自立したい。けど、私の先輩が中国人学習者を分析しているのですが、その結果の中に、両親に依存しながら自立したいっていう独特な感覚を持っている。だからその両親の管理下のなかで独立するっていうか自立する。で、最終的には両親に守ってもらいたいんだけど、その中で自由になりたい、みたいなそういうのを持っているっていうのもわかっています。まあこういう感覚が、というか精神的な変化っていうのがすごく学習面に影響を与えていて、どんどんどんどんその勉強よりも、バイト、ですね。そちらの方に時間を割くようになっていく、っていうことがわかってます。で、そうすることで、どんどん点数が下がって行って成績が悪くなっていくんですけど、彼ら自身もそれは悪いことだと思っている。それは何でかっていうと、まあもちろん点数が悪い、それ自体も嫌なんですけど、すごく両親から期待をされているんです。絶大な期待を背負って、それこそ親戚じゅうの期待を背負って日本に来ているっていうことがわかりました。お金の面もそうですし、全員で見送っていくっていう、まあ家族じゅう、親戚じゅうの期待を背負って来ているので、彼らにとっては成績が悪くなる、落ちこぼれていくっていうのはすごい辛いことなんです。だけど、アルバイトもしないといけないし、勉強できないし、なんかこの辺ですごくこう、悩みだすという時期があります。この間に学習動機がどんどん低下していく。で、もう段々ここで「できない」っていうことに慣れていっちゃうんですね。「どうせやっても無理だし」みたいな。そうするともう学習性無気力という状態になってさらにもう「勉強はあまりいいか」という感じになっちゃうということです。

では、実際の教室ではどういうことが行われているのかということで、私が教室に入って、参与観察

をしてまとめたんですが、まず、居場所ということがありました。教室に居場所があるかっていうことですね。友達がいるかどうかっていうことです。彼らの場合、ものすごくメンツっていうのが非常に大きな力を持っていて、同じ中国人同士であっても「あの人は嫌、でもこの人はいい」とか「あの人には失敗を見せたくないけど、この人は絶対大丈夫」とか。彼らの国籍とは違う方とは別に、中国人同士でそういう力関係みたいなものがあって、非常に複雑な力作用が働いているなかにいるっていうことがわかりました。そういう中で学習観っていうものを形成していくんですが、そこにはやっぱり教師の対応ですね。「この人たち言ってもできないから、あんまり相手にしない」とか、ただただ叱るとか、そういう経験を受けながら学習観とか教師像を形成していきます。「先生ってどうせいつも怒ってるんでしょ」みたいな感じですね。そういうのをどんどんどんどん築き上げていって、それが学習動機に影響しているっていうことがわかっています。

それから、これは教師編のほうなんですけど、その再履修者に対応している教師はどう考えているかという、やっぱり、どんどんネガティブな評価っていうのを築き上げていきます。「どうせやる気ない」とか「めんどくさい」とか「ややこしい」とかそういう話もよく聞きました。そうすると、問題解決に向けた努力ということで、何を实际やっているかという教室の中では、再履修者の人はどうせ寝てしまうんで「前に座らせる」とか、「常に注意する」、注意するっていうのは気を向けるっていうことになるんで、本当に「こらこら、起きなさい」という注意ですね。あと、「こっちを見ているから指名する」というのは、すごく自分から発信することが少ない、でも話して欲しいので視線が合えば当ててるっていう形でしか、対応を取ってないっていうことがわかりました。でも、そういう対応だけだと再履修者の態度ってなかなか変わらないっていう

のが現実で、じゃあそれを踏まえてどうするかっていうと、この下にあるんですけど「特に何もしない」です、結局。「どうしたらいいかわからないので、そのまま放置してます」という方が非常に多かったです。それから「だけど、あの人たち悪い人じゃないんだよね」とか「一応真面目にやってるよね」とか「日本語ができないわけじゃないんだけど」という感じですね。ポジティブに捉えようとはしている。それから「自己防衛」ということで、これは何かって言いますと、「再履修者がいて、教室の中がちょっと混沌としてしまっているのは私のせいではなくって彼らのせいでもなくて、学校のせいだ」と。「カリキュラムのせいだ」とか「学校の教えるスピードが速すぎる」とか「専任がリーダーシップを取ってないからだ」とか、なんかそういう感じで責任を転嫁する感じですかね。そういうことがわかりました。これあとでまたもうちょっとお話しします。それで、この3つの結果を再度見直して、一つにしてがっちゃんこしてまとめたのが、こっち、この結果です。これはその再履修者になるまでの過程の結果図ですね。こういう過程を経て、学習動機を低下させていく、で、それからこれ、学習動機が低下してから回復する人ももちろんいるんですけど、回復するかそのまま低下したままなのかっていうところに影響を与えている要因の結果図となっています。これは今日は触れません。

では、こういうデータを取ってきて理解するっていう時にどういう風なことが私の頭の中で起こったのかっていうことをお話ししたいんですが、まずは学習者から出てきた概念に「私はもう大人」というのがあるんですが、その中にあるデータの例ですね。ちょっと読みます。「勉強もわからないから嫌になったりアルバイトに行くのも疲れるので嫌になったりすることがある。国に帰りたいと思うときがありますが、日本に来た以上、私は負けないで頑張ろうと思います。で、両親と電話をしても体に気

をつけて勉強を頑張りなさいと言われます。だからここで頑張るしかないんです」っていうような、こういうことを言う人が非常に多かったんですね。これを理解する時に、彼らの置かれている状況ですね。中国の営業担当の方にお話をよく聞いたりもしてたんですけど、やっぱり先ほど申しましたように、両親からの絶大な期待と支援と、お金が無いのにすごい一生懸命工面して留学資金を作って、送り出しているという状況がある、と。それから精神的にどんどん成長していくとか大人になっていくような過程でもありますので、「自立したい」という強い気持ちを持っている。それからさっきも言いましたけど、メンツですね。すごいメンツを重んじる文化で、メンツを大事にする。自分が失敗するのは良くないと。それから、日本に来て孤独を感じているっていう状況に置かれているんだっていうことを踏まえつつ、じゃあ自分はどうだっただろうっていうことですね。自分の過去の経験、まあ高校生、大学生ぐらい、大人になっていく、まあ何が大人かわかんないですけど、両親から離れて行って自立しようとしていった自分の経験ですね。そういうものをいろいろ思い出しました。で、私も一度海外に逃げていたことがあるんですけど、そのとき何を考えていたかっていうと、日本にいと親類もいるし家族もいるし、なんていうんですかね、何かどこかに甘えっていうのがあるっていう感じをもっていました。頼る人がいる、そんな感じですかね。そういうのを全て切り捨てて、全然ないところに行きたいと思ってオーストラリアに行ったんですが、そういうときのことをいろいろ思い出しました。あと、海外に行ったときに、外国人としてのいろいろな経験をしました。日本では感じないこともありましたし、強盗にあたりして、いろんな経験をしたんですけど、そのときのことをまあいろいろ思い出したんです。じゃあそのときに自分が孤独を感じていたかとか、両親とか家族から自立をしたかったのかとか、

そのときどうしていたのかっていう、いろんな思いが響き合っていると云いますか、こういうことを頭の中でやりながら彼らが言っていることを分析していくってことですね。彼らにとっての大人っていうところの背後にある文脈を踏まえて、自分の経験を照らし合わせながら意味を探っていくないと、ただ文字面だけ追っていて分析するだけでは全く意味が無いということです。

一方、教師の方なんですけど、さっきちょっとご紹介した部分ですね。「どうしたらいいかわからない」とか「放っておく」とか「他の人と同じようにする」とか「悪い人ではない。真面目、できないわけでは無い」という部分です。まず、「初級のスピードが速いから」。これは初級クラスの人が多かったからこれが出てます。再履修者になるともう二度とメインストリームには戻れないとか、一緒に来た人たちはどんどん上に行っちゃう。でもそこに飛び級で上がることもないしっていうことですね。「学校は結局、成績より出席ばかり気にしてるんでしょ」ということと、あと「専任がリーダーシップを取る」とき、この学校はクラスコーディネーターをすべて非常勤の先生がやっていて、専任っていうのは、空いてるコマに入る。あと学校は成績管理、出席管理、事務的なことをするっていう学校だったので、こういう発言が出てます。順番通り並べましたし、先ほども申しましたので、なんとなくお分かりいただけると思うんですけど、これでこうグループができるんですよ。「どうしたらいいかわからない」とかこの辺は結局問題を放置するところ。「悪い人ではない」とか「できないわけでは無い」とかはポジティブに捉えようとするところ。で、右側の四角ですね、これは、問題はどこにあるのかっていう、私も含めてですけど、教師がする分析ですね。

これを見たときに、そのときに読んでいた論文があったんですけど、教師の話にはシークレットス

トリーズっていう、聖なる物語がある、っていうのと、カバーストーリーズっていう、ごまかしの物語っていうのがあります。聖なる物語というのは、教室の中だけで実際に経験していること、教師が思っていることっていうか、他の人には絶対言えない教室の中だけの話っていうのを皆さんも多分お持ちだと思います。それで、ごまかしの物語というのは、教師同士で話すとき、「私こんなことして、こんなうまくいきましたよ」とか「こういう失敗があったときに、こうしたらこうなったんですよ」とか、よく見せるっていうか、そういう話をしちゃうことがあると言われてます。なので、さっきの再履修者をポジティブに捉えようと思えるっていうのは、まさにこのごまかしの物語で、理解ある教師である、っていうように振舞っているんじゃないかということを考えてました。それから、「原因を学校のシステムとか方針に帰属する」っていうところなんですけど、改善は努めているんですけど、教師にはツテがないということで、まあ、学習者のことを理解しようとしているんだけど、問題は学校にあって私はどうしようもないので、私が悪いわけではないんですっていうことですね。先ほどの論文を読んで、データを見たときに、やっぱり自分のことも考えました。私も「あれだけ注意したのになんでしないんだ」とか「たしかにあの子、いい子なんやけどな」とかっていうのを感じていましたし、いい人というだけで、実際私が何か対応してたかっていうとそんなに対応してなかったなっていう反省もあったりとか、自分の状況に照らし合わせてもこういうことなんだろうということで、先ほどの二つをまとめたらこういう風に、教師の対応として結果が出るということになります。

ここで今日お話ししたいことに戻りますけども、まず「理解とは」っていうことと「研究者とは」っていうことと「理論とは」っていうことです。これを、経験を理解するとはどういうことなのかという、

インタビューや分析の中で何が起きているのかっていうことをお話ししながら考えたいと思います。まずは「経験」なんですけど、視覚とか聴覚っていうのは、その人と同じ視点に立てば感じ、同じ経験をすることはできます。例えば、あべのハルカスから見える景色とか、「めっちゃきれいやったよ」って聞けば、そこに行けば、自分も同じ経験はできます。ウグイスの声が聞こえてきたっていうんだったら、私もそういう機会があれば聞こえるかもしれない。同じことは経験できるわけですよ、視覚と聴覚。まあ厳密にいうと違うかもしれませんが。同じウグイスの声を聞いたのかっていう、その全く同じウグイスの声が聞こえるっていうのはないけど、ほとんど同じ経験はできます。感情と知覚の場合はどうかっていうと、テーブルの足に自分の足の小指ぶつけたって言われると、痛みっていうのは私たちみんなで共有できる、同じものは感じれますよね。で、急いで信号を渡ろうとしたら交差点の真ん中で転んだっていう、痛みは分かりますし、もしかすると、これすごい恥ずかしかったっていう経験として話しているかもしれません。私は交差点の真ん中で転んだことがないんですけど、おそらく恥ずかしいっていう経験・感情は今までの違うものから想定して、「あ、恥ずかしいんだろうな」っていうのは感じることができます。「食べ物にあたった」っていうのは、これはものすごく苦痛でしんどいって聞きますけど、私は当たったことないので、実際どんなものはわからないんですけど、でもやっぱりお腹下したりしたことはあるから「多分あんななんだろう」っていう、なんとなくはできます。次はあれですけど、母親を失った悲しみ。こういうのを聞かれて「ああ、かわいそうやね」「つらいでしょうね」とか言うけど、「あんた母親いるじゃんか」っていう経験もあったりして、これはまあ感覚・知覚ってなってくると、ちょっと他者の経験を理解するっていう部分では、感覚・知覚っていうのは変わってき

ます。

経験を秩序付けるものって何かって言うと、対象・空間・体っていう枠組みで、そこにその人が意味を付与している。だから経験は物語を伴ってって、ここから見える姿っていうのがあるという風に言われています。自分にとって直接思い出せないものであって、類似した過去の思い出を呼び起こして、自分の痛みの思い出として構成されるものだという風に言われています。じゃあ経験を理解するのはどうということなのかって言うと、そこに伴っている物語ですね。それを深く理解していく。それでしか理解できないし、それをしないといけないってことです。それを理解するためにはどうしていけばいいかって言うと対話、インタビューで実際起っているのが対話ですね。その中で相手の経験を理解するんだ、ってということなんですけど、対話というのはやっぱり、聞き手は話し手の言葉を理解すると同時に、それに合わせた態度をとります。で、それを受けて、また違う発言をします。つまり言葉というのは、その関係の中で意味を持っているってということになります。つまり、経験というのは私たちから独立してあるものではなくて、対話の中で作られていくものなんだと。結局、過去を語るっていうことは、今ここで私と話していることで築き上げられているもの。だから過去の経験っていつ話しても同じかっていうと違うんですね。だからインタビューしていると、私と協力者の間で生まれたものであって、私と彼らが作った過去の記憶。で、それを分析して理論化をしている、ということになります。じゃあ得られた理論は何なのかってということなんですけど、やっぱり協力者と研究者の協働の産物である。で、ガーゲンが生成的理論っていう部分で、慣習的な理解のあり方にのみ、新たな意味や行為の世界を開いてくれるような世界について説明するものを出さないといけないと言っているんですが、まさにその M-GTA で出てくるものというのはこれなん

じゃないかな、という風に思います。

■牛窪：中井さんありがとうございました。ちょっと時間が押しているのですが、休み時間を取らずにこのまま木下先生のお話に行きたいと思います。では木下先生、お願いします。

2. 4. 発題3：M-GTA 考案の経緯（木下康仁）

こんにちは。お二人の発表を聞いていて、いつも他の方の研究発表を聞いていてそのお話の中に自分が引き込まれてって一緒に考え始めてしまうことがあります。今回もそんな印象を受けたんですけども、やっぱり一つには、一生懸命研究に取り組んでいる姿っていうのがありますよね。同時に取り組んでいるテーマ・内容そのものも意義があることだと。M-GTA も含めて、研究方法というのはやっぱりそれを、側面からサポートするみたいな、まあ敢えて言うとその程度のものなんだと思うんです。ですが、その程度であれ、あるかないかによっては格段にその研究の中身そのものについて違いも出せるという風に思います。そこには一言で凝縮すると、まあ私の感想ですけども、やっぱり人間が見えるってということなんだと思うんです。それも一人だけのモノローグの人間じゃなくって、他者と関わる社会状況の文脈における人間っていうお話があって、まさにその通りなんですけれども、その他者と関わる姿があって、そこで我々が理解できることっていうのはやっぱり「意味」なんだと思うんです。意味を通して理解できると。そういう現象なんだろうなあという風に思います。

いつも時間通りに話が終わらなくて、苦情をいっぱい受けているんですけども、まあ今日 40 分でまとめろという牛窪さんの厳しい枠組みがあるんですけども、お話したいことがたくさんあるんですね。それはいろいろ自分が考えてきたことを伝えたいということで、今日はこの時間の中でできるだけ

頑張ってみたいと思います。

なぜ M-GTA でなければならなかったのかというびっくりするテーマを牛窪さんに出していただいて、なんでびっくりしたかっていうと、そんな風に自分が考えたことなかったからなんですね。かれこれ最初に論文を発表してから二十年ぐらいになるんですけども、最初から M-GTA を作ろうと考えて始めたのでは実は全然ありませんでして、その都度その都度、自分としてはイメージでいうと、つま先立つような緊張感で考えなければいけない問題に取り組んできたものが段々と形になってきて、今に至っているという風にご理解いただければと思います。

1990 年代以降の話ですけれども、この時期に先立つ 1960 年代に最初のグラウンデッド・セオリー・アプローチが提唱されているんですね。私はマスターが UCLA だったんですけど、そのときに初めてその本を読んで、非常に感銘を受けたわけです。それは一点、社会学者ってどういう仕事をする人間なんだろうかという、そのメッセージで読めた。そこには実務の、実践との関連、実務の人と一緒に協働、それで、研究者と実務者を対等に位置付けていると。そういう研究者の有り様っていうのは非常に強い印象として残りました。それが質的研究で理論生成をする研究方法の本であるということは自分の中では結びつかなかったんです。

私はエイジングとかケアのほうの専門で、日本に帰ってから十年ぐらい、ある現場で実務で働いていて、まさに自分自身が実践者・実務者の立場で、一生その世界で仕事をしていこうというぐらい思っていました。生きた人間が織りなす世界っていうのは、どんな高齢の人で認知症の人であっても、やっぱりものすごいダイナミックな世界なわけですね。そこに研究者としての訓練を受けた自分自身が当事者として関わることによって試されてくる。そのリアリティの世界で十年ぐらいを過ごしました。そこでは研究と実践っていうのが、実践者という意識の中で

今思えば統合されていたような気がします。ですから、継続的比較分析法というすべての GTA のエッセンスの部分っていうのは実務の中で発揮できていたように思います。私の初期の 3 冊・4 冊の本の中で書いてあることでもあります。ですが、オリジナルの 1960 年代に出た『データ対話型理論の発見』っていう訳語で出ている、*The discovery of grounded theory* という本（グレイザー、ストラウス、1967/1996）なんですけれども、自分にはやっぱり研究と実践の、実践の比重を強調する本として読めたんですけれども、そこの中で言われてることっていうのは、質的データを使いながら理論を生成していくための研究方法論だと。それで、そこにある理論とは何かと。あるいはそのベースにある考え方としての実証主義的、客観主義的なスタイル。これは自分が実務を離れたときに、がーんってぶちあたるような問題として浮上してきました。

M-GTA につながる動きというのは実は 1999 年、GTA について最初に書いた本なんですけれども、今、質的研究をトータルに理解するための一つの起点としてやはり質的研究がいろいろな領域、特に多様なヒューマンサービス領域を横断して関心を持たれてくる流れ、これが世界的に起きてきたわけなんですけれども、その起点が大体 1990 年代ごろからって言われています。じゃあ、なんで質的研究に対しての関心が広範囲にわたって見られるようになってきたのかというところの理解で、それは決して単純なことではなかったという風に思っています。大きな二つの流れが、一方では、高度な数量的な方法を用いた研究でも、現実の問題に対して効果的な結果は得られていないと。つまり、人間の複雑さを理解する方法としては多変量の解析方法がここまで進んだとしても、その結果得られるものというのが、十分な説明力をもちえていないんじゃないか、そういうある種の限界認識というものがあって、そこから反転する形で人間の複雑さをトータルに理解できる有

効な研究方法の模索、これが質的なデータを使った研究で、具体的には、アメリカの看護界を中心とした動きにつながっていったというのが一つだと思います。

この流れでいうと質的研究っていうのはまだどちらかという、牧歌的なイメージでも捉えられるように思うんですけども、二つ目の見方は、もっと自分に跳ね返ってくるような反省的な視点で、つまりそれまでの研究のあり方・調査のあり方に関しての批判ですね。主に、社会学がこの視点を提起してきたという風に思うんですけども、これは人間と人間の調査関係において、やはり調査者と調査に協力する人たちとの関係のあり方。研究者が非対称な影響力を持つと。これは一つ、ポリティクスというもの、倫理の問題と絡んで指摘されたという風に思います。

そこから、研究者と研究協力者との協働の作業の一つとして一つの理解を導いていくという方向性、これはナラティブとか社会構成主義の方から強調されていて、共同生成性という概念によって語られている。つまり、今まではある特殊な病気の経験とか、あるいは社会的にマージナルな位置に置かれていて差別とか偏見とかを受けて生きてきた人たち。例えばハンセン病の場合など、病の経験と差別、偏見と合体した例として重要な研究の流れを実は成しているわけですけども、従来は研究者によって語られることによって一応理解されるような、そういう流れであったところから、語りにくい、その人の当事者の経験を研究者が理解する、つまり信頼関係の元で聞くことによってはじめて語られるようになっていくという。つまり、研究者によって語られるという受身的な研究のあり方に対して、語りにくいものが語られるような場を作るところに研究者が積極的に関わって、そこではじめて当事者が受身形ではなくて、自分の言葉で語れるという、そういう研究のあり方が提起されてきた。これも今、一つ、質的研

究につながる流れだと理解すべきだという風に私自身は思っています。

そうすると、一つ目の方はまだ牧歌的という言い方をしましたけれども、研究方法としてスッと入っていけるほうで、二つ目の方はもっとう自分への問い直しというものを、厳しく問われているというような方法ですね。で、質的研究ってこの二つが別々に成り立つ話かっていうと決してそうではないだろうと思うんです。つまり質的研究、もっというと M-GTA で行われている研究が対象とする人たちはどういう人たちかという、なんらかの形で生きていくことに対しての課題を抱えている人たちだと。あるいは困難を抱えている人だと。それは先ほどの研究協力者になっている人たちを考えれば、やはり、支援も必要であるし、当事者としての課題もいろいろ抱えている中で、頑張っている人たちですよ。ですから、ここにあげた二つの視点はやっぱり両方が組み込まれるところに質的研究っていうものは位置付けられるし、また、研究計画として構想されるべきだろうと。

そう考えることによって、難しそうですけれども、実は我々は研究を安心してできる立場が取れるということ。それはどういうことかという、研究をするときに研究する自分自身を決して安全圏に置かないと。自分も、一方では研究活動において当事者化していく。当事者化するということは、この図の下の方の視点というものを常に自分が意識することなんです。これが研究の倫理の考え方として一番実践的だという風に思います。

今のような考え方をしていく上で、M-GTA っていう研究方法はごく自然に、しかも、頭でっかちにそういう責任の問題とか倫理的な問題を意識しなくても自然に研究展開の中に入っていけるというか、いくつか安全装置を組み込んでいるっていう風に説明できると思います。さっきも、プロセスっていう話がいろんな局面で出てきましたけれども、最初か

ら今のように考えていたわけではなくて、段々、一つひとつ自分の課題を考えてきて、それぞれが繋がってきて、今の M-GTA と呼ばれる方法になってきているという風にご理解いただければと思います。ですから調査をするときに、いろいろぶちあたるような問題点というのは多分私なりに、自分の実務の経験とかそのあとの調査の経験とか、あるいは質的研究の方法の問題とかで直面しながら、これはこう考えたらいいんだろうとかっていう風に対応してきた、その集積のようなところに来たのかなあという風に思っています。

今ちょっとずれましたけれども、質的研究っていうのは実は多様な個別の質的研究方法から構成されていて、それを総称するときに質的研究法とか質的研究とかいう言葉がおかれているわけで、だから個別の部分の理解なくして、質的研究を語るということとはできない。なぜなら個別な部分の中のそれぞれの特徴が非常に異なって幅があるからなんです。客観主義的な、実証主義的な立場もあれば、社会構成主義的な立場もある。つまり認識論ですから、何を現実と考えるか、理解できるかっていうこと自体大きく違ってらんです。その幅のなかで M-GTA の位置っていうのはさらに他とも違う独自の位置にあります。そこは理論というものを目的に置くという点ともつながるんです。今日は触れられませんけれども、本当に質的研究方法の特に分析に関して興味がある、あるいは博士論文で取り組もうとする人は勉強してみると面白いと思うんですけれども、コーディングという作業です。

今、話を単純化するためにインタビューデータをテキスト化したものをデータとして分析を行う場合を考えてみますと、インタビューデータは読み物としてはサーッと読めるわけですよ。あたかも自分がそこにいるかのように、逐語起こししたものを読めるんです。ただそれをどう分析したらいいかっていう話になった途端に、今までの質的研究法を考え

た人たちはみんな苦心しているわけです。苦勞してるんです。今の M-GTA もその一つの形なわけです。それで、ちょっとわからない話になってしまうかもしれませんが、グラウンデッド・セオリー・アプローチと呼ばれているものも、多様化して、それぞれが独自のコーディング方法を提案しています。

M-GTA と他の GTA の大きな違いは技法としての切片化っていうのがあるんですけども、データを文脈から離して、意味の脈絡とは切り離して、語られた言葉そのものを細かく分けながら意味を研究者が解釈していくという作業なんですけれども、当初は客観性を担保するために質的データでもそういうことをグレーザーが中心になって主張していて、今や本当にそんな風に考えてやってる人は誰もいないと思います。それはもう明らかに自己矛盾で消えていったものだという風に考えてもいいでしょう。ここではその問題じゃなくて、簡単に一言だけ触れたのは、グラウンデッド・セオリー・アプローチっていうのはデータに密着した分析から、独自の理論を生成していける質的研究方法っていう風に言われているわけです。

では、そのコーディングってどうしてるか。M-GTA は分析テーマと分析焦点者っていう二つの視点だけで見ていけばいいっていう風にしてるんですけども、グレーザーにしてもストラウスにしても、ストラウス・コービンにしても、彼らがどんな風に説明しているのかっていうのを見比べると、データに密着した分析を標榜しながら、実際に提案しているのは、データのコーディング作業、切片化すると、いろんな、たくさんのラベルを作り出すことになりますよね。そこからさらにそれをまとめていったらいいのかっていう件に関して彼らがどういうことを言っているかっていうと、分析が収束できるための一つの促進用の枠組みをそれぞれに提案しているわけです。だから単純にデータに密着した分析で結果に至っているという話ではなくて、その途中で、結

果が統合化されていきやすいように例えばある種のマトリクスを使いますと。それはコーディングの考え方として、グレーザーでいうと、例えば理論的コーディングのための18個のコーディング系という非常に複雑な視点を導入して、それを介してみていく。そうすると最終的な結果としてデータに基づいた理論が得られるという説明をしているわけですよ。

何を言っているかという、多分わかりませんか？わかる人は、『グラウンデッド・セオリー論』という私の一番新しい本(木下, 2014)を読まれてる人だと思えますけれども、言いたいことは二つです。質的なデータの分析というのは、まずデータから離れなければ分析はできない、始められない。最初の一步、あるいは最初の半歩、離れるということをどういう方法によって、しなさいっていう風に説明しているのか。だから切片化っていうのは作業としてはやりやすい方法なんです。つまり、インタビューの意味の脈絡とは別次元でスタートしていけるから。で、一旦離れた作業結果というのがラベルとしてたくさん出せるわけです。そうすると二つ目は、たくさん出たものを、じゃあ今度は、どうまとめていったらいいかっていうその方法の話なわけです。そこになったときに、例えば、コーディング・パラダイムとか、ストラウス・コービンでいうと条件マトリクス、これは、同心円的に、個人から社会とか世界とかっていう風に範囲を広げていくものをまとめていったらいいとかっていう。いろんなアイデアを出してくれているわけなんです。

そうした方法での質的なデータの分析っていうのは、今はもうダメだと思っています、僕は。なんでダメかっていうと、その作業をしている研究者ってじゃあその時どこに立ち位置があるのか。もっと自分が、語られた人の世界にできるだけ自分自身をコミットさせる。その視点でもって語られた意味を、インタビューの意味を考えなければ、分析にならな

いでしょっていうことを、考えたわけですよ。じゃあ、それをするにはどういう方法が適切なのか。で、今言うところの分析テーマと分析焦点者という二つの視点。みなさんの実際にやる分析テーマっていうのは、この研究で自分が明らかにしたいことは何なのかということのプロセスの視点を入れて設定するものです。短い文章に設定するんです。わざわざ文章化まで強調しています。それにも意味があるんです。短い文章でピシッと一つの意味を表現するっていうのは非常に難しいことなんです。それで、もう一つが、分析テーマって、質的データの分析をするときに自分の関心テーマを先に設定していいんですかっていう風に思われるかもしれません。そして、できた、それだけについて見ていけばいいことになって、それってデータをまんべんなく見ることにはならないんじゃないですか。よく自分の関心の高いところだけをピックアップして選び出していくような分析になるのではないんですかって思われたりすることもあります。けれども、ここでいう分析テーマというのは、データ全体に対して、平たい表現で自分の関心を問いに設定していくと。ここはかなり、検討が必要であるし、経験も必要になる部分です。でも何を問題にするかっていうのは、実は実務に詳しい人であれば、そこでの問題意識に関しては一番健全な、外部の専門家よりも多分新鮮に捉えているんじゃないか。

さっきのお二人の研究でも、先生たちとか、でも自分も先生だったわけだし、中井さんの場合には同じ学校で働いている先生たち。あの人たちの世界で、問題意識を見出していますから。そういう意味では、明らかにしようとする、問いとして設定しようとしていること自体はむしろ現場の問題意識を健全に反映させられるところからスタートできていると。そういう研究テーマの設定は、私は望ましいことだと考えます。専門家や先行研究だけから研究を構想するというのは、多分質的研究とは違う別の研究の

方法が適している場合のように思います。

もう一つは、分析焦点者。分析焦点者っていうのは、インタビューに協力してくれているAさんBさんとかではなくて、研究計画上、自分の設定した分析テーマに対応して、カタルの大学の日本クラブに参加している学生とか。日本語学校の再履修になった学生とか。そういう風に計画上、集団として設定するわけです。で、集団として設定しないと、結果がどこまで一般的に応用可能かという問題に絡んできますから、そこは全く個人レベルよりは一旦抽象度をあげたところに分析焦点者を設定するんです。それゆえに、実践に使いやすい理論の形にもまとめていきやすい。抽象度のレベル設定によって結果とその先、実践まで繋がっていきます。そういう意味があります。

もう一つは、分析焦点者の視点を意識するという事は、データを見る時に、自分がそのデータをただ見るだけじゃないわけですよ。そこには語った人たちの集合、つまりAさんという人のインタビューを読む時にも、Aさんのインタビューを読むのではなくて、分析焦点者として、つまり再履修になった学生たちという、その視点を入れてみているからです。だから、この意味というのはAさんにとってはどういう意味であるか、再履修者っていう人に比べたらどういう意味で理解すべきかっていうことを、いつも自分の作業として通していくわけです。データと自分が直接の関係になってデータの意味を考えるっていうことは非常に難しいことなんで、その難しさとはさっき言ったデータと自分の関係がどうしても維持できなくなってしまうということなんです。自分が研究者になりすぎてしまう危険があるっていったらいいでしょうか。だけどその時に、いま言った分析焦点者という視点を入れてみていくと、絶えず、自分がどう考えるかということと、この人たちにとってどういう意味があるかっていうことを考えなければいけない。そうすると、自然と、意味

の検討っていうのは深くなっていきます。

つまり、データの解釈っていうのは、人間理解の勝負です。どんな具体的な問題をテーマにしても。自分が研究対象として協力してもらっている人たち、その人たちの経験をどこまで自分が理解していけるかという、その勝負で、その時に、実践に近ければ近いほど有利かというとは必ずしもそうでもないと思ってる。実務に近いっていうことは、研究上、今言った分析焦点者の視点を重視しないと距離が逆に近すぎてしまう。自分自身の考え方っていうものを一旦こう、反芻するっていうか、自分の中でもう一回距離を置くっていうこと。研究している自分自身と、実践者である自分自身をきちんと分けてデータを見れるかっていう風に考えると分かりやすいと思います。そうするために、分析テーマと分析焦点者は非常に有効なんです。こういう説明をいつもしてるんです。そうすると、「あ、そうだな」って多分聞いた人はみんな思うんですけども、実際に、研究の内容でみていくと、やっぱりなんか物足りないものを感じるわけです。それは頭ではわかかってても、分析焦点者という、自分の視点とは違うもう一つの視点に本当に徹して、意味を考えているかどうかという。わかりやすい分だけ意識がスッと弱くなったりするようなことかなと思います。だからこういう分析作業っていうのは始めたら、終わるまではかなりねちっこい検討作業を延々としきったほうがいいですね。圧力がちょっと抜けたりすると、また軌道がずれてしまうような感じです。

コーディングの方法ということでみていくと、まあ仕掛けというか、勉強だけで理解しようとする、その枠組みの中にスッと吸い込まれやすいですけど、比較してみていくと、いろいろな解釈を促進できるようなことを提案してくれているという、途中の道具立てなんです。

それに対して、M-GTAは、途中はそういう道具立て・解釈を促進してくれるようなことは何にもな

いんです。ただ分析テーマと分析焦点者だけなんです。それによって、分析が切片化もしない形でどうやってデータから結論まで至れるか。そこはどんな場合でも、分析を制御する必要性っていうのがあるわけです。全くオープンっていうのは無理だと。それで、制御するところで M-GTA に置いているのは、分析テーマなんです。言ってみれば、スタートラインでゴールの課題を問いとして最初に設定するわけです。

したがって、そのゴールに到達できるところまでは分析テーマと分析焦点者っていう二つの点だけに集中して、意味を考えていきなさいと。途中で分析促進用にこの道具を使えば、ぼんっと一段進めますっていう、そういう仕組みは質的研究としては面白くないと思います。本当に結果として、自分にとって意味のあるなにかが新しく分かって、なおかつそれが人に伝えたいことでもある。そこまでの作業をするとしたら、やはり、自分自身に対しての負荷は、かけるところはかけないといけないんです。それで、その上での分析全体をどう制御していけるかっていう方法を考えたわけです。

もともとグラウンデッド・セオリーの特徴的な用語という、継続的比較分析と理論的サンプリングと理論的飽和というものです。「比較」なんです。比較というからには、何と何を比較するのか、って問題があります。継続的っていうのは、どのように比較していくのか。どこまでやったらいいか。まあ単純にいうと、ポイントはそこになります。それで、比較の材料、ここが最初の作業で難しいんですけど、ここから入ります。比較の材料は自分自身が見出す、作るということです。これが、切片化のアプローチと一番違う点です。

継続的ってどのように比較の作業を進めていくか、何と何を比較していったら、データのどういう内容のものを今度は見ていったらいいのかということが、理論的サンプリングという、データに向かう方向性

を示す考え方です。で、どこで終了したらいいのかの判断が理論的飽和化。一応言葉として覚えておいてください。

ここから、今日の一つのポイントにしたいと思ってることなんですけれど、先ほど、質的データの分析っていうのは、まずデータから一歩離れなければ始まらないという、その離れがたさ、離れるのが難しいという話をしましたけれども、質的データの分析とは、意味を読み取るということです。それ以外は基本的にはないと思うんです。意味ってまあ、データっていう具体的な話の内容として、いろんなことが語られているわけですよ。そこから、意味を取るっていうのを、作業の形でイメージしたのは、一つはこの方法です。

大文字の「I」は、データの中の Indicator, ある意味を指示する箇所を示している。分析テーマと分析焦点者の2つの視点からデータを見ていったときに、自分がデータのある箇所に着目するところから始まります。

例えば、自分が設定したテーマに関係がありそうだっていう風に、自分が気がついたところを一つの具体例として、そのことを説明できるような概念、要するに抽象度をあげたところに概念を考える。ただこれは、一つのデータ、着目点で、それだけを説明する概念を考えても同じレベルの話なので、意味がないわけです。概念化するというのは、意味を効率よく表して、実際の現象の、ある一定の多様さを一つの見方に立つことによって説明できる、捉えられる、そういう作業だと考えてください。そうすると、模式的な説明ですけど、一つ、具体例としてそれを説明できる概念を考えながら、その時に自分が考える概念っていうのは、この一つのことだけじゃなくて、それ以外にもデータの中で類似して、あるであろう、他の一定の多様なことも説明できるような概念として考えるということです。

だから、1をもって、10を説明できるような概念

を最初から考えましょうという話なんです。当然、最初は大変なんです。でも自分が何をしようとしているのかということは非常にわかりやすいと思うんです。ただ、意味だけって考えると、漠然とした気になりますけれども、作業として、具体的な内容を一定程度効率よく説明できるような概念を作るのが解釈のポイントであるっていう、そのことは、さらに最終的にはゴールという風に表現しましたけれども、自分が最終、結論を得たいこととの関係が必ず何かあるはずなんです。

最初のころは、自分でもどういう考えかっているのかわかりません。だけど、「かもしれない」というところからはじめていく。それでどうして大丈夫かっていうと、この作業を進めていくと、先ほど言った、比較分析をいろんなレベルで同時的に行っています。「比較」というのは、類似しているものだけじゃなくて、それと反対の場合。対極の場合ということも常にチェックしていくわけです。だから比較によって、自分の考えた解釈が成り立ちそうなのか、あるいはそうでもないのか、データでサポートされる概念がどのくらいあるのかということが作業として段々わかりますから、そうすると、この見方ではこの概念は成り立ちにくいだろうな、とか、あるいは、これは大丈夫、いけそうだな、という風に判断されていく。この解釈の方法では判断の適切さを保証するような外在的なものは、何にもない。適切かどうかということは、自分が判断する。自分しか、ある意味、判断できない作業であると。

じゃあ、そういうものとしての結果の適切さはど

うやったら、きちっと評価してもらえるかっていうのが出てきますよね。これも当然考える。この図1が一つの解釈っていうことの作業イメージです。

M-GTAはそれをもっと具体的に「分析ワークシート」というフォーマットを使って行います。概念名、定義、具体例、データのバリエーション、理論的メモを書いていく。一つ概念ごとに、こういうフォーマットを立てて作っていくわけです。

簡単に言いますと、データでさっき着目した、Iの①がありますよね。最初に着目した箇所っていうのは、具体例の中のここに書き入れていきます。それで、それをどういう意味で自分は解釈したかということ短い文章で定義欄に書きます。短い文章で書けば、意味は確実に担保できます。さらにそれを凝縮したものとして概念名を考えます。概念名だけだと、その時に自分がどういう意味で解釈したかということをおぼろげに忘れたりします。実際、作業をしながらそうじゃない他の場合も考えられるとか他の例ではどういう場合があるかかっていう、あるいは、先ほどの中井さんの例で言うと、自分の場合にはこうだったよね、とかっていう、この一つの概念を考えていく上で、自分の思考、解釈の考えをここに、細かく理論的メモ欄に記入していきます。できるだけ疑問形で。先ほどの概念化の作業っていうのはこのフォーマットを使ってやっていく。

したがって、データを見ていって、具体例が一定程度、ここに出てくればデータの確認はされたと解釈としてここで、自分の考えた概念が成立するであろうと判断する。だから、データそのものはここでその根拠となる部分が、記録されていく。これは一つの概念の作業イメージですね。ここで言っている概念っていうのは分析の最小単位なんです。そこからまた今度は、全体をまとめていくための作業をやる。で、それを表したのがこの図2です。

4つのレベルに分けています。「生データ」と「概念生成」と「カテゴリー生成」と、あとは「明らか

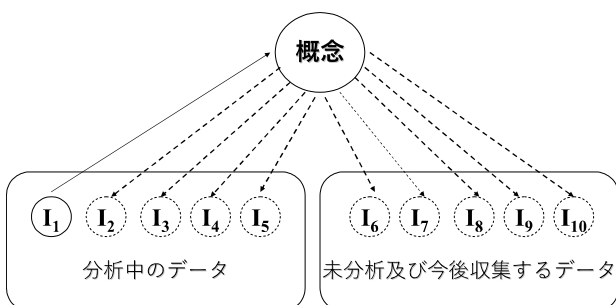


図1. 質的研究法の多くに通ずる概念生成のモデル

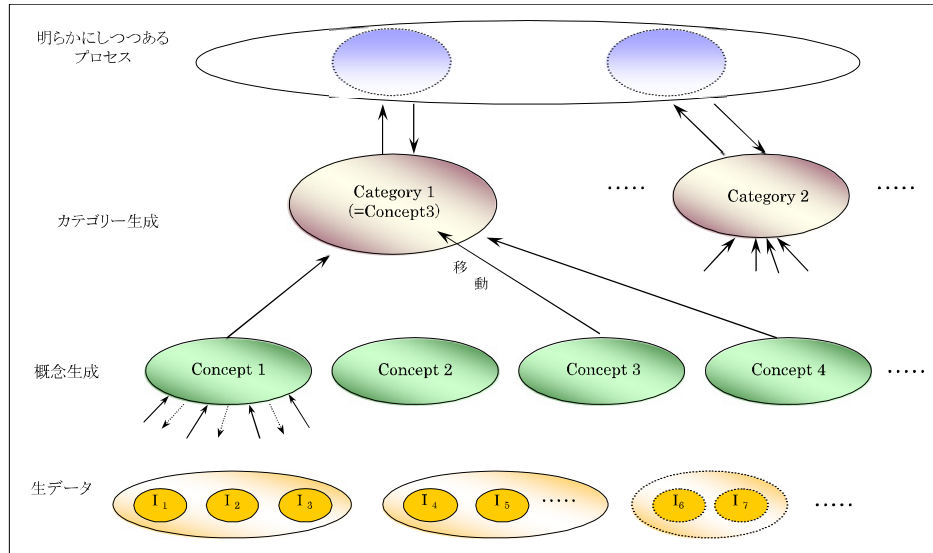


図2. M-GTA 分析のまとめ方

にしつづめるプロセス」です。概念生成っていうのは、下の二つです。生データと概念生成。矢印が上に行ったり下に行ったりしている。データと、密着な関連での比較、確認作業をずっと通してやっていくということです。

横に行けば、オープン化の形になります。横に向かうということは可能性を広げて検討していくということになります。それに対して、今度は比較からまとまりを作って、全体としての統合を図っていきます。上にいくと、収斂化になります。ですから、データから概念を作って、概念の比較検討から、まとまりのあるカテゴリーを作っていく。カテゴリーによって構成される最終的な結果のイメージにまとめていくということで、横に検討して開いていくながら、比較から縦のまとまりを作りながら、抽象度を上げていく。最終的にひとつのまとまりまでやっていくわけで、継続的比較によりこの分析全体を行う。

最近、質的研究はもう定着して一般的なものになっているので、質的研究をはなから否定するような立場っていうのは、多分ほとんどなくなってきていると思いますけど、まあ20年前は、それとは対極の世界で、査読対象として受理してもらえようかかみたいなことが、いろんな雑誌で珍しくなかつ

たです。そういうことも踏まえて、結局、何が進んできたのかという風に考えた時、質的研究っていうものを質的データの分析方法として考えるようになったと言えます。まあ大きくはこの流れなんだろうと思うんです。でも、それだけでない何かがあるとしたら、それは何なのかと。M-GTAは質的データの分析方法ではありますが、質的データの分析方法だけではないという風に考えています。じゃあ、どこに違いが出てくるか。それは、結果に対してです。データを分析したら質的データであっても、それは研究結果になるかということ、まあそういう立場もあると思いますけど、M-GTAは敢えてそうではないという、ただデータを分析したらいいんでなくて、自分が設定した問い、つまり分析テーマに対応する結論が得られるかどうか、得られるところまで分析するということは、この方法がしなくてはいけないことであると考えます。

普通は、研究だからデータがあって分析したら結果になって、論文書いて終わりです。しかし、そうではなく、分析は何のためにするか、データって分析するのが主目的ではないです。それがもう一つの目的のため、それは自分が設定した問いに対して、結論を明確に得られるところまでであるということなんです。それが理論にこだわる意味のはずなんで

す。でも、その旗をおろしてしまうと、全体が別物にも変わってしまいかねないぐらいの問題で、だから結果が形として求められているんだと。これって、ある意味当たり前なんです。なぜかっていうと、質的データで、GTAの場合にはデータの収集に対して、ものすごく柔軟な立場を取っているわけです。データ収集してから、分析が始まりますけれども、質的データっていうのは、作業の途中で必要な問い、確かめないといけない事柄が出てきたらならば、それはデータに立ち返って、あるいは、新たにデータを探して、確かめながら、進めなさいという話です。

データの収集は調査の初日に始まり、最終日まで続くってことです。で、インタビューデータだけじゃなくて、例えば、体験談のようにすでに発表されているものでもいいし、新聞記事でもいいし、その時自分が確認しなければいけない問いに対しては、関連するものは、全てデータとする立場です。なぜそういう確かめが必要かっていうと、一つの理論っていいですか、最終的にまとめようとしたらならば、その途中で、必要な疑問が出てきたら確かめるのは当然なわけです。

そういう進め方が一番適しているのは、実は質的研究方法と言われているんですね。これがそもそものGTAの大きな特徴だったわけです。まずはこれだけで終わります。

実践と研究の関係の話。当初、GTAっていうのはアメリカ看護界、それから日本でも看護界、世界的にも看護領域が先導したんですけれども、日常的に自分たちが行っていることの中には、まだ自分たちもきちっと確認できていない、しかし実践上、素晴らしい部分っていうのはあるはずなんだと。それがやっぱり個人の経験として留まってしまっている。共有できない。可視化できない。それを明らかにしていこうという、こういう大きな期待があったと思います。だからそうやって発表されたものは、実際そういう風にまとめて提示されると、確かにそうだ

なっていう風に実務の人は評価しやすいものでもあると。これが、看護領域のように、学問的な自立性の確立という大きな課題を抱えていた時に、GTAに対しての一つの大きな期待だったわけです。だからそれは、実践を理論化するというところの一つの位置付けです。ですが、今はそれだけでは半分だという風に私は思っています。「実践の理論化」は、まあいいですよ。これまではそれでよかったと思いますけれども、ここまで質的研究法が進んできたということは、逆に今度は、理論としてまとめられたもの、あるいはモデルとしてまとめられたものが果たして適切かどうか、役にたつかどうか、という実践。つまり研究によって導かれた理論を、実践に試していくという、「理論の実践化」というもう一つの大きな課題が射程に入ってきているのではないかということを考えています。

その二つを含めて、研究と理論と実践ということを考えれば、これは一つの「運動」のようなものだと思うんです。社会運動って言いますか、このことは、研究って一体誰が何のためにするのか、研究する人の業績作りだけでは到底ないわけですし、やっぱりもう一回実践っていうか、現実の場面に戻って、そこで試されていくという、そこで改良されていくという、つまり当初立てた問題に対して、改良されていくっていうことは、段々と対応力も増していくということなんだと。そのプロセスに研究者と実践者が関わっていくという、終わりのないプロセスなんですけれども、やはりその研究のあり方としては、一つのこういう方法が提起できることではないかなという風に思います。

■牛窪：木下先生、ありがとうございます。すみません、一聴衆として聞き入ってしまった、全く時間の管理を忘れていたんですが、これから休憩を挟んでしまうともう時間がなくなってしまって勿体ないので、このまま最終的な質疑応答に移りたいと思

います。すみませんが、登壇者の方は前の机・椅子のところに座っていただいて、質問のある方はもうアンケート用紙を回収するのではなくて直接、挙手をしていただいて、聞きたいことを出していただければと思います。

3. 会場質疑応答

■牛窪：では、かなりの情報量だったと思いますので、感想、あるいは自分はこう考えている、あるいは実際に自分が分析していてここが分からないということでも結構ですので、会場の方から出していただければと思います。いかがでしょうか。

■（会場）：すみません、興味深いお話をありがとうございました。私もすごく聞き入ってしまって、ちょっとうまく質問がまとめられるかわからないんですけども。私も博士論文の方で M-GTA の方を使わせていただきました。それで、ちょっと基本的な質問かもしれないんですけども、個人的に分析を進めながら、途中で「ん？」と迷ったことが一点と、それからあと、その論文に対しての評価で聞かれたことで一点ちょっと思うことがあるので、伺わせていただきます。

分析を進める過程で、M-GTA は GTA ほど対象者の数がそんなに確保されなくてもいいということも一点あると思うんですが、例えば 20 名弱の数からスタートしても、だんだんその分析を進める上で分かれていって、だんだんその一つひとつのデータの数が少なくなっていってしまう場合に、例えば、さっきの中井さんの教室編のほうでもデータの数が、学生が 3、教師が 5 っていう数があったんですけど、この辺のこういう 10 以下とか 5 以下の数でも、ちゃんとそれを分析として、対象の数として、その数で、概念とかを作ってしまうのかっていう点と、それからですね、M-GTA のこの私のとても惹かれたところにこの感覚的理解の重要性とか、研究をし

た人の経験とか感覚をっていうのがすごく大事だっということもすごく共感したんですけども、やはり論文を評価される立場になったときに、そんな感覚的なことでいいのかっていうのを、すごく、経験とか感覚の話はいいみたいなことを言われたことがあって、その辺も、どういう立ち位置で見ていったらいいのか、それとも私の説明力がやっぱり足りないという問題なのか、その辺を伺いたいと思いました。

■牛窪：ありがとうございます。いかがでしょうか。

■木下：まあよくある質問ですよ。で、一つは数の問題で、じゃあみなさんが院生とかの立場で評価される側っていうのは非常にこう、窮屈というか、自由度の厳しいセッティング・状況なんだっていうことがあるんですけども、そこを置いて。なぜ数の問題が提起されるのか。20 人で少なければ、50 人必要なのか。100 人ならいいのか。それは個人の経験に偏ってしまうと、そこから理解された内容もまた偏っているのではないか。一般化とかサンプリングの代表性みたいな話の立場からすると素朴に疑問になることです。

数の問題に関して、数の問題で答えることは基本的にはできないです。あとはだから、このくらい、みたいななんとなく了解可能な話で、3 は少ないかもしれないけど 20 あればね、みたいな。でも、それって根拠はないわけです。判断で。どの視点で考えたらいいかというと、まずは、分析テーマで自分の設定した課題がどのくらい取り組むに値する、価値あるテーマなのかと。そこからまず位置付けるのが一番自然だと思います。だから先行研究が必要なわけですね。それで、そのテーマに対して取り組むにあたって、じゃあ量でいうと数量的なアプローチですよ。数量的なアプローチで、どういう結果がなされているのかとか、どういう研究が可能かどうかという風に考える。そのうえで、数量的なアプローチでは十分に理解されそうもない、つまり、質的な

アプローチのほうに適しているのではないかという、そこが一つの切り替え、ロジックが必要ですよ。その時に、じゃあ質的アプローチがいいっていうことは、どういうことなのかというと、個人の経験を詳細に聞き取れるっていうことなんだと思うんです。私の表現だと、質的データっていうのは、ディテールが豊富で多様で複雑な人間の経験です。我々がインタビュー調査をする時に、先ほど言ったように、どういう研究テーマであれ、やはりその人たちの経験っていうのは、それなりに複雑なはずなんですよ。それなりに問題にも直面してるはずなんです。だから研究テーマになってるっていう風に思いますけれども、そういう、単に経験の中身で考えた時に、個人の人数に換算できる性格のものではないという。20人聞いてもちゃんと聞いてなければ、3人ちゃんと聞いた方のデータの方が望ましいという。そこも、ちゃんと説明しないとイケないんですけども、つまり質的なアプローチで質的なデータであって、なぜ質的なデータで、どういうデータをそこで求めたいかというところまでまず、いって、そこから3人か20人かっていう話になるかと思うんですけども、問題によってはそんなにたくさんに協力者が得られない場合もあります。詳しいデータが聞けたとしても、たくさん聞ければいいということでもないんです。

意味を解釈するというのは決して度数に、数字に換算出来ないアプローチなわけですよ。ただ、了解可能な方法は考えなきゃいけないんで、例えば極端に数が少ない時には、現実問題としての協力者の確保の問題だとか、あるいは一人ひとりのデータの内容の豊富さを強調することになると思うんです。そのうえで、M-GTAは、方法論的限界っていう考えを入れて、今回の自分のこの分析は、この人数の人たちのデータを対象にして行ったものであるという風に、データそのものを、最初に提示しちゃう。それによって、分析した結果、自分なりに一つのま

とまりにまで到達できたという風に判断しているのであれば、そのように書けばいいと思います。

さらに、自分なりには一つのまとまりというところまで分析できたという風に判断している。そのことが、はたして適切かどうかという判断が必要だと考えると、その判断をしてもらう、一番の方法というのは、自分の分析結果をその領域、その内容に詳しい人に評価してもらうと。しまいには実践で使ってもらうということです。つまり、この方法だの一つのまとまりまで理論的飽和化の判断ができるところまでいったとしても、でもそれが完成しているわけじゃないんです。そうじゃなくて、そのことは、一つの羅針盤のような意味を持つ可能性がある。それはどのくらい有効かどうかということは、今度は研究方法とか分析方法ではなくて、その結果の内容に関して評価してもらいたい。そのうえで、まだ20人でよくて3人で足りないっていう話なんでしたらば、それはいっぺん、振り出しにというかね。考え方としてやっぱり積み上げていかないと、いきなりその数の問題の質問に対して、直に答えようとしても難しいんですよ。その適切さの判断自体が自分でするしかないっていう風に、最初からなってるんで、それはその通りなんです。

それと二つ目の質問。感覚的なものっていうと、今までの分析ではやっぱりノイズなんです。邪魔なもの、不純なものだから、そういうのは退けたうえで、研究者が分析することのほうが必要な内容に近づけるということなんですけど、複雑な人間の経験を、意味として理解していこうという作業をする時に、自分自身が自分の理解、自分の解釈結果に対して、それなりの手ごたえが得られなくて、どうしてこんな分析ができるんでしょうっていう問題なんですよ。だから、自分自身が、さっき人間的な意味で、口頭で言いましたけれども、分析的には自分の解釈の考えに投入すること、自分がコミットすることによって、自分が納得出来ることというのは、

たぶん他の人にも説明できるはずなんですよ。逆に考えて、感情とか感覚的な理解っていうものを排除したとしたら、その時の研究者って一体どういう人間・存在かっていうと、こうなったらもうパソコンソフトを使って、いろいろこう、言葉でもって、安全性をこう見てもらったりとか、集めてもらったりとかっていうことをすればいいわけで。だから、つまり人間理解の証拠っていうことなんですよ。どこまで深く、協力してくれた人たちを理解できるかと。自分が理解できたことっていうのは、自分の中で、記述で活きますからね、書く力になる。人を説得する力にもつながっていくという。そういう芋づるのような一連のものであって、どこかを断面でパッと切られて、ここでいいのって言われると困っちゃうわけですよ。でも、質問はもっともでもあるわけで、多くの場合。そうするとそれに答えるっていうことが自分の考え方をちゃんと整理することにもなるっていう風に考えていかれるといいと思いますし、最近、審査のところでもだいたい、その審査の相手方の方でもう、いくつかのパターンを読めるぐらいにはもう定着してきてる気がします。みなさんがどう見ているかわかりませんが。

4. まとめ

■牛窪：では、時間を少し超過しておりますので、最後に根本さん、中井さんからも一言ずつ何かコメントをいただければと思います。先ほどの質問に対してでもいいですし、会の全体のことで、補足があればそれでも構いません。お願いします。

■根本：はい、ありがとうございます。先ほどの質問っていうのは、今の二つ目の、感覚的なことでのいかっていうことですね。私も言われてはいたんですけども、実はそれって、二つあると思っています。一つは、実際に質問する側が最初から質的研究はそんなものだろうと思っているという場合。そ

ういう場合、対処がなかなか難しいと思うんです。どうしても質的でそう言われてしまうから。最初からこの人たちはそういう風に思ってるんだっていうように思わざるをえないことが多々あるような気がします。もう一つは、それが事実である場合です。実は私、M-GTA をやりたいという相談を受けた時に、「なんか先生たちからこうやって言われたんですよ、どうせ主観的なんだろって。ひどいですよね、最初から決めつけて」っていうんです。でも、「いや、私が見ても主観的だと思うよ」ということがありました。実際に主観的であって、感情的な場合もあるんです。だからそこは今一度、先ほど木下先生がおっしゃったように、きちんと手順を踏んで分析を進める必要があります、その上で、自分はちゃんとやっているんだ、冷静に分析してるんだっていうことを担保できたならば、相手に腹を立ててもいいかなと思っています。

というのは、私の、先ほどのお話のところでもちょっと補足に関わるんですけど、M-GTA を選んだ理由で「一人でできそうだから」選びましたと言いましたが、実際には一人ではできないと思っています。なぜかという、一人でやってしまうと主観に偏ってしまうっていうところがあるからです。M-GTA の分析を続けることは、非常にねちっこくて辛い作業だと木下先生がおっしゃったんですけども、それを続けるためには、分析テーマに対する思いが強くないと続けられないと思っています。ただ、その思いが強すぎると、自分の思い込みで、自分のやりたいようにコントロールしてしまうおそれがあります。結果はこうであるはずだ、だからこうなるはずだ、こうなるべきだ、ということになってしまうというところが、結局その感覚的なことにながってしまいかねないと思います。やはりその辺りのコントロールというものは、きちんとすべきです。それが必要だからこそ、一人で最初から最後まで全部を完成というわけにはいかないだろうなとい

う風に常々思っています。ですので、ちゃんと自分自身振り返りながら、分析を続けていく必要があると思います。以上です。

■中井：すいません。私、余計なことを話しすぎて一番言いたいことを結局言えず、しかも時間を多く取っちゃって本当に申し訳ありませんでした。今、ご質問があったようなことと、さっきの補足をしたと思うんですけども、対象者の数のことってというのはもうまさに自然科学でやられている客観化の枠組みの一つであって、私はそもそも、こういう経験を理解する研究は構築主義的なものとして考えています。じゃあ、それにどういう風に反論していけばいいかっていうことなんですけど、やはり調査とか分析、ここでやるようなものってというのは聞く側と聞かれる側、特に経験についての調査ってというのは、そこにある物語を築き上げていくということはさっき申し上げたことなんですけれども、間主観性を作っていくっていう形ですかね、強引にいうと。

ですから、その過程では自己開示も必要だし、自分と他者との関係をもう一度見直すっていうか、自分の中の内省、他者との関係との内省っていうのが必ず起こってくる。それで、それを研究としてまとめられるのがM-GTA、まあ他の研究方法でもそうだと思うんですけども、構築主義的な視点に立つ研究の意味であるだろうし、それが理論的感受性とながついていって、内省できることっていうことが理論的感受性であるだろうし、それを論文として発表するとか、こんな主観的やって言われた時に反証する方法としてやっぱり、過程ですよ。自分がこういう視点で入って、こういうインタビューをして、ここでこういう風に考えましたっていう過程が読者の方にもすべてたどれるようにしておく。論文と、自分の考えと、その結論に至るまでがやっぱり明らかであるということ。それが質的研究の質の担保の一つになるのかなっていう風に思います。以上です。

■牛窪：ありがとうございます。企画者として、最後の木下先生のスライドで出ていた、「理論の実践化」という言葉に非常に強く惹かれました。実践研究というのは、実はこの学会の一つのテーマでもあるんですけども、実践研究とは何かというテーマの本を以前、学会の委員を中心としながら作った時に、実践研究というのは一つの「運動」なのではないか、という文言にたどり着いた、ということがありました。その文言を、先ほどまさに木下先生がおっしゃったので、私は、聞きながら鳥肌が立ちました。今後、研究者として理論を作る、そしてその作った理論を現場でどのように試していくか、それによってまた理論を改善していくというのは、おそらく日本語教育だけではなくて、関連するいろいろな分野で進めていかなければならないことだと思います。本日は、休憩全くなしに2時間半、皆さんには、座りっぱなしで大変申し訳なかったんですけども、非常に濃厚なお話が聞けたのではないかと思います。ご来場くださった皆様、ありがとうございました。改めて、登壇者の方々に拍手をお願いいたします。

文献

- 神吉宇一（編）（2015）.『日本語教育学のデザイン——その地と図を描く』凡人社.
- 木下康仁（2003）.『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂.
- 木下康仁（2007）.『ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法——修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.
- 木下康仁（2014）.『グラウンデッド・セオリー論』弘文堂.
- グレイザー, B. G., ストラウス, A. L. (1996). 後藤隆, 大手春江, 水野節夫 (訳)『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか』新曜社. (Glaser, B. G., & Anselm L. S.

(1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Aldine Publishing Company.)

西口光一 (2012). 「教育」分野——日本語教育研究の回顧と展望『日本語教育』153, 8-24.

根本愛子 (2016). 『日本語学習動機とポップカルチャー——カタールの日本語学習者を事例として：M-GTA モノグラフシリーズ 3』ハーベスト社.

広瀬和佳子 (2015). 「実践研究」から考える質的研究の意義——言語観・教育観・研究観のズレを可視化する議論のために. 館岡洋子 (編) 『日本語教育のための質的研究入門——学習・教師・教室をいかに描くか』(pp. 49-70) ココ出版.

細川英雄, 三代純平 (編) (2014). 『実践研究は何をめざすか——日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版.

本田弘之, 岩田一成, 義永美央子, 渡部倫子 (2016). 『日本語教育学の歩き方——初学者のための研究ガイド』大阪大学出版会.